



明日の岩泉へ

東日本大震災 岩泉町復興の記録 その3

明日の岩泉へ

東日本大震災 岩泉町復興の記録 その3



岩泉町

表紙とカバーの図は、「平成 18 (2006) 年頃の岩泉町小本周辺の地図」(国土地理院発行の数値地図 25000 (地図画像)「盛岡」を使用して作成された「地図展 2012」/主催:地図展推進協議会)のパンフレットから加工したものです。



明日の岩泉へ

東日本大震災
岩泉町復興の記録
その3



復興が進む

織笠清、加藤恒悦、熊谷貴里子、佐々木悦子、佐々木一幸、長崎基一、箱石英慈子、三浦トシ子、三浦浩子、和野浩也

はじめに 明日の岩泉へ その3

あの東日本大震災から早いもので四年の月日が流れようとしています。

自然の猛威にただ呆然としていた震災直後から、復旧・復興のため町民一人丸となり取り組んできたことが、ひとつずつ形になり、眼に見えてわかるようになりました。

集団移転地の宅地分譲も済み、被災した小本小学校・小本中学校、小本保育園はこども園として、小本観光センターは役場小本支所、診療所、三陸鉄道小本駅が併設される小本津波防災避難施設として、それぞれ平成27年度中の完成を目指して工事が急ピッチで進められています。

小本に広がる三陸の海は、何事もなかったかのように今日も私たちに大きな恵みを与えてくれます。私たちは何事もなかったかのようにすること、は難しいことですが、先人達が幾多の困難を乗り越えてきたように日々の暮らしを取り戻すべく、小本地区の復興が岩泉町全体の活性化につながるとう強い信念で今後も取り組んでまいります。

国内外から、ご支援、ご協力を賜りました皆さまへの感謝の気持ちを決して忘れず、町民とともに歩んでいくことをお誓いしてご挨拶いたします。

岩泉町長 伊達勝身



目次

はじめに 明日の岩泉へ その3

第1章 ふるさとをつくる

再び小本で……小本地区に活力を！

第2章 明日の岩泉を担う

座談会 若い世代が描く 新しい小本

発言！ 夢と希望と志と——中学生たちの意見

第3章 岩泉の産業

第4章 岩泉・小本のいま——その3

1 「フォトグラフィア」からのメッセージ

——「だれでもフォトグラフィア」経緯

2 岩泉・小本のいま——その3

3 「復興」を撮る——撮影会

4 世界からの復興へ応援

5 「だれでもフォトグラフィア」とともに——写真家・橋本照高

49

39

21

7

3

第5章 復興の進捗

1 東日本大震災・復興の中の岩泉

2 復興の進捗

3 発展につながる復興

おわりに 明日の岩泉へ その3

126

93

第1章

ふるさとをこころでつくる

新住宅地で 災害公営住宅で

それぞれの場で

それぞれの暮らしが始まった

災害公営住宅への入居が進み

住宅再建もいよいよ本格化する

漁港や堤防の工事も進んでいる

災害の痛手を乗り越えて

私たちは

新しいふるさとの構築を模索する



再び小本で……

防潮堤や山付堤防、河川堤防などの工事が進み、三陸鉄道小本駅の駅舎と避難ビルを兼ねた防災拠点の建設も着工した。集団移転地での新築を予定する人もいれば、公営住宅に入居する人もいる。住まいを直したり、建て替えたりして元の場所に住み続ける人もいる。

花を育てるひとり暮らし

金澤 慶治さん

(小本災害公営住宅に入居)

■仮設に3年 公営住宅は快適だが まだ慣れない

津波の時は、小本小学校の前が家だったので海からも離れているし大丈夫だと思っていたら、テレビが落



ちそうになって電気が切れた。小本小学校の脇の避難路を上がったところから見えていたら、バリバリという音がして土煙が上がってきた。水がだんだ

ん上がってきて、自分の家も浸かってしまった。

小本の仮設住宅に3年くらいいた。仮設は寒いし小さかったし、今風の建具だった。

元の家は流されなかったが、床板が水で浮き上がり外れてしまった。建具も半分ぐらい外れた。これが津波だ。家を直すのにはかなりのお金がかかるので解体した。子か孫が継いでくれれば元の土地に建て直してもいいが、誰も継がないので公営住宅を選んだ。

快適だが、こんな造りの家に住んだことがない。郵便ポストが近くになく、駅のそばまで行かなければならないので何とかして欲しいと思っている。外には電動自転車で行くが、バッテリーを充電するのに玄関のところまで持ってこなければいけない。窓の外が舗装になっていれば自転車が置けるので充電に便利だと思う。

娘が来たときは毎朝床などを拭いていたので、通信販売でスリッパ式の雑巾を買って履いていたら隣の奥さんに感心された。空気清浄機も買った。電気の暖房を2つつけると電気代がかさむ。風呂は新しく汲み直す方が経済的なようだ。トイレの暖房便座も普段は差

し込み（プラグ）を抜いて節約している。

■山口屋で買い物 花を育てる毎日

買い物は自転車で山口屋^{*}に行くが遠くなった。この間、山口屋の店主に「おれが近くに引越してきたら、店が遠くに逃げていった」と言っていて笑ってきた。

以前は裏の家の人と白菜などの野菜のやり取りなどをしたが、今は畑はやっていない。公営住宅の部屋はA棟^{**}の1階を希望したらこの部屋になった。片方の隣は埼玉生まれの若い人でおばあさんは知っている人。もう片方は東京に行っていた人だ。端の家の人は同級生なので会えば話をする。

昔は歩いて畑に行っていたので足腰には自信があったが急に弱くなった。津波の年の正月までは正座して般若心経を読んでいたが、正座ができなくなった。古市の病院に通っている。（平成26年）3月に下血で貧血を起こして倒れた。胃カメラを飲んでも原因が解らなかつたが、22〜23歳ごろに胃を病んだことがあるので、胃ではないかと思っている。

これからについてはあまり考えていない。仮設にい

た時に小学生からもらったサボテンが大きくなってきたので、小学校の裏の倉庫に鉢を取りに行つて分けて植えた。肥料を工夫して育てている。夏にサフランを植える予定で楽しみにしている。

息子と一緒に安心だ

畠山孝男さん 辰子さん

（小本災害公営住宅に入居）

■家はすっかり流された

仕事は酒造りで、箱石千寿子さんの酒屋で50年世話になった。「龍甲」という銘柄の酒を造っていた。妻もそこで働いていて知り合った。箱石さんから土地を50坪買って家を建てたが、今回、町に買い上げられた。

家はすっかり流されて、3日くらいたってから見に行つた時は何もなかつた。小さい家だったが、近所の新しい家も蔵も全部流されていて、その光景に涙が出た。小本小学校まで水が来ていたので、相当



※ 小本地区にある商店。被災後小本仮設団地の隣の仮設商店街に入ったが、新たに三陸鉄道小本駅近くに再建した

※ 鉄筋コンクリート造 2階建

大きい津波だったことが分かった。岩泉（地区）に向かう途中で川にたくさん松が流れているのを見た。

小本仮設に3年住んで慣れたので、この小本災害公営住宅より良かった気がする。仮設の壁の薄さもそれほど気にならなかったし、ご近所ともなじんでいた。小本では上と下に地域が分かれていて、それぞれ地域内での付き合いだったが、小本仮設では隣やその隣が同級生だったので付き合いがあった。

■新しく家を建てるより 公営住宅を選んだ

私は新しく土地を購入して家を建てることを希望したが、妻が「子どもに借金を残すのはどうか」と反対した。「大牛内（地区）に土地を求めよう」と言ったが、妻は、上水道が来ていないことと、車の運転ができないので一人になったら困ると反対した。いろいろ相談して公営住宅に入ることにした。

このB棟^{*}の角部屋を選んだのは、見学に来た時に道路から入ってすぐなのと、隣がないので窮屈な感じがなかったかと思うからで、他に希望する人はいなかったの決まった。

（平成26年）5月10日に引っ越してまだ少ししかっていないが、住み心地としては、広くなったせいかもしれない。仮設はストーブ一つで暖かだったが、ここは寒いので灯油がたくさん必要になるだろう。

2階には2部屋あり、今はアパートに住んでいる4代の次男がゆくゆくは入居する予定だ。不便なところは、棚が高くて使えないことだ。物干しも高すぎて踏み台を使っている。突っ張り棒で別に棚を作っている人もいる。物干しの軒がないのも不便だ。建物に手を加えられないので物が片付かない。あとは外で使える水道があると作物が洗えてよい。

普段は、ここから4km先にあるカモイカ（丘）に毎朝通ってジャガイモなどを作っているが、売ったりはしない。買ひ物は山口屋さんを利用している。

今朝も花の鉢を世話しながらご近所で語らっていたので、これから公営住宅の人たちとなじんでいくと思う。

■「ああ 変わっていくな」

住む場所が決まったことで落ち着いた。年金暮らし

なので、使いすぎて借金しないようにしたい。子どもは男の子2人で、長男は千葉県にいるが、次男とこゝで一緒に暮らせば安心できる。

花の鉢植えも置ける。仮設で西和賀町の老人ホームから苗をもらった。花の世話は好きだ。2階から工事をしているのを見ると、ああ変わっていくなと感じる。

元の土地をかさ上げして建てた

野崎アイ子さん

(元の場所に自宅再建)

■小さくてもよいから2階建てにしたかった

地震の時は家にいた。とにかく大きい地震で、普通じゃないと思った。その2日前にも大きい地震があったので、ある程度避難の準備はしてあった。地震が起きた後、息子は消防団活動で出ていったので、荷物を積んで一人で車に乗り、山を一つ越えた実家に避難した。当初は1晩か2晩で帰れると思っていたが、29日間避難していた。避難所だと情報も支援助物資も入るが、実家だったのであまり情報が入ってこなかった。その後、町民会館に1週間、温泉ホテルに1カ月、それか



ら仮設に移った。

流された家を見たのは津波の次の日だった。息子が来て「家の方はダメだ…」と言って一緒に見に行った。家は流さずにあつたが、1階は全く駄目で2階は大丈夫だった。本当はすぐにでも建て直したかったが、地盤が沈下して危険地域なので再建することはできないということだった。それが解除になり、40〜50cmかさ上げすれば建てられると聞いて、建てることを決めた。

息子は賛成してくれた。やっと自分の家を建てられると思ひ、うれしかった。息子もいるので、小さくてもいいから2階建てにしたかった。

建て直す工事に2カ月かかった。(平成26年5月の)連休の後引越してきた。住んで約2カ月になる。

■景色が変わってしまった

まちの中心が三陸鉄道の小本駅周辺に移ってきてしまっている。小本小学校も山口屋さんも移ってしまった。震災前は周りにも全部家があつたが、今はまばら

で景色が変わってしまった。災害公営住宅に移った人も多い。集団移転地を選んで皆さんと一緒に買った方が良かったかもしれないと思うこともあるが、自分の家ができて落ち着いたので、復興を感じた。皆さんに大変お世話になった。

普段は山口屋さんでお買い物をしているが、山口屋さんが移転したので少し遠くなってしまった。こちらで再建してくれたらなあと思うこともある。車に乗って行けばいいことだけど、いつまで運転できるか分からない。移動の販売車が来てくれれば雨の日や外に出られない時に便利だと思う。

分譲地を見学しながら

本村稔さん リウ子さん

(集団移転地に新築予定)

■見つかった訪問着を金婚式に妻が着た

妻はもともと小本の出身。私は盛岡市の在で、岩手県北交通という会社で小本・宮古間の定期バスの運転手をしていた。妻の実家の古い家を建て直してから32年たったところで屋根を葺き替えたが、次の



年に津波が来て33年作り上げた財産が全部なくなり、裸一貫になってしまった。元の家は海にかなり近かったが、まさかあんな津波が来るとは思わなかった。

津波から1週間くらいして、家があったところを見に行った。小本小学校の体育館に、2階の桐のたんすに入れてあった訪問着などが濡れないで置いてあった。写真はビニールの袋に入れたままの形で友達の家茶の間にあった。着物が見つかったのは良かった。洗濯代に10万円かかったが、金婚式に着ることができた。

小本の仮設に抽選で入り3年住んだ。(平成27年の)3月がくれば4年になるが、復興はまだまだだ。

■子どもたちの泊まれる広さの家があれば

新しく建てる家は平屋でよいし、子どもたちが盆や正月に来て泊まれるぐらいの部屋があればいいと思う。元の家のところは、山付堤防になったので建てられない。

(平成26年の)お盆の時に集団移転地の分譲地の見学があるので、見てからどこの場所にするか考える。三陸鉄道小本駅の裏の移転地は駅に近くて便利だが、津波が来ている。私たちの希望地は交差点のところ、三陸鉄道の線路の裏だ。災害はいつ何が起るかわからないので、高めの場所がいいと思っている。三陸鉄道と今度できる自動車道路(三陸沿岸道路)は同じくらいの高さになるようだ。日陰にはならないと思うが、風が通るかどうかわからない。

土地の広さは90数坪と70数坪の2種類あるが、70坪の方にして家をつちり造った方がいいかなと思っている。消費税も材料も上がっているので、2千万円以上掛かるようで大変だ。二人だけなら公営住宅でもよいが、隣近所に気を使うので小さな家でもいいので建てることにした。住宅金融支援機構からでも借りれば、小さい家なら建てられるかと思っている。

仙台市あたりでは補助が1千万円くらい出るという話もあるが、このあたりでは5000〜6000万円だ。年寄りにはお金は貸してくれないし、借り入れは350万円が上限である。補助金は後から出るので、

最初に自分のお金が必要だから困る。新しく買った土地があれば、それを担保に借りるという方法がある。

■不安もあるが元気を出そう

仮設にいる人の中には、新しい土地に建てようという人もいる。もともと小本でも上と下に地域が分かれていて、運動会でも上と下の対抗だったので対抗意識がある人もいる。山口屋さんがちょうど真ん中ほどにあった。

集団移転地では隣近所が誰になるかが分からない。暮らしているうちに慣れてくることもあるかもしれないが、最初は気になるだろうと思う。

買い物は山口屋に行ったり岩泉(地区)に行ったり、生協の宅配などを使っている。ちよつと大きなものは宮古市か岩泉(地区)に買いに行く。

大牛内(地区)にいとこの平屋の家を借りて、ふとんなど支援してもらったものを入れていて4年になるが、いつまでも借りていられない。今度の冬でこんな生活も終わりにしたい。まだ続くようであればたまらない。元気を出さなければいけない。

小本地区に活力を！

住民の意見も町の情報も正しく伝えようと、被災後すぐに「小本を思う会」が立ち上がった。それは、4年を経て新しい緩やかな関係の構築を模索している。「小本を元気にする会」による「夢あかり」などの活動も続いている。

いち早く立ち上げられた仮設店舗、ローソンの出店、山口屋など地元の商店の復活、三陸鉄道の復旧などで、地域の人々の生活が支えられている。

復興のつなぎ役として

小本を思う会 代表 三浦 義昭さん

■ 何でもかんでも話をまとめるのではなく…



震災当初は情報がなかなかうまく伝わらず、町の情報があつた。この情報はきちんとしていた。「これはきちんとして、えなくては…」ということ、被災後約1カ月たった頃、町と小本住民の役員の人たちで

定例会を行うようになった。当時は移転の候補地や高台移転の話が出てきて、会の結成は我々住民の声をあげていくために必要だった。

メンバーは当初は8人、40〜50代の人たちが中心でこれからの小本を引っ張っていく人たちだ。会をつくりたいと声を掛けた時、みんな「自分が動かなくては…」という思いだった。それぞれ違う意見があってもいろいろな意見が判断材料になる。何でもかんでも話をまとめるという体制ではなく、強制力のない緩やかな会である。

平成24年5月に町長に提言書を提出した。提言は移転の候補地のことだけでなく、震災の時に問題があったことを解消していくために6項目にまとめた。提出前には住民の意見も聞いた。

その後、被災した元の場所に暮らす人やみなし仮設の人も入り、メンバーは15人まで増えた。

■ 住民の意見 町の情報——情報を正しく伝えたい

主な活動は住民の意見を吸い上げたり、町の情報を正しく公平に伝える活動である。他に「ちぎり絵」を

開催し、家に閉じこもりがちな仮設生活の人に外に出てもらうきっかけをつくるなどした。キャンドルを「3・11」と並べる企画を立て、役場の小本支所長や総務課と相談。小本地域振興協議会とともにメモリアルイベントの一部として実施することになった。

復興課との意見交換会・勉強会なども行った。平成25年11月の1回目の意見交換会では具体的な話が出てこなかったが、平成26年6月の2回目の時は具体的な話が出てきた。当初被災した土地は事業を起こさないと町は買い取りをしないということだったが、移転地に移る人については土地を買い取るということになった。住宅再建の他に土地を購入するという苦しい状況だったのが解消できることになった。買い取りの話が出る前



撮影：三浦トシ子

に、戻って再建してしまった人もいる。複雑な思いがあると思う。もう少し早く分かっていたら……。――

■離れていても小本と切れることはない

「小本を思う会」はいつかは消滅する会だが、復興へのつなぎになればと思う。震災から4年が経過し、復興もいろいろ見えてきて動きが出てきている。新しい自治会・まちづくりをどうしていくか考えていかなければならない。小本部落会（以前からの自治会）、移転地の新しい自治会とで協議会をつくつたらどうかという話がある。自治会は違っても互いに緩やかにつながっていききたい。神社のことなど共通することもあつた。被災前と被災後では町の中心が移ってしまうが、離れていても関係が切れることはない。

これからの小本は、交流人口を増やさないといけない。岩泉にしかないものをうまくアピールしていきたい。漁業だけでは生活が難しいので、体験したり、来てもらったりして、交流人口を増やすべきだ。漁業に限らず農業も酪農も、若い人に「地元で働くかなあ」と思ってもらえれば良いと思う。

皆でやる気を！

小本を元気にする会 会長 竹花純一さん

■小本は人のつながりが強いところ

経営しているガソリンスタンド（小本郵便局の斜め向かい）は津波で2mくらい浸水した。土砂が流れ込み、自動販売機も倒れた。3月14日には重機が入って土砂を片付けてくれ、建物は骨組みを残して1週間ぐらいで再建することができた。

自宅は1階が全部浸水したが2階は大丈夫だった。片付けは隣組や親戚などみんなが協力してくれた。小本は人のつながりが強いところだ。おかげで（被災した年の）5月の連休には直して引越すことができた。小本駐在所の所長が転勤になったので、5月末に送別会を開いた。その時に「何でもいから何かやらないければ」ということになり、「小本を元気にする会」が立ち上がり、会長にされてしまった。メンバーは当初7人だったが、民生委員の人も含めて10人く



らいいになった。

■バラバラに分かれて住む人たちをまとめよう

たくさんさんのイベントを企画して実施している。小本* 夢灯り夕涼み会をはじめ、仮設商店街のオープニングセレモニー、復興おもと青空市、ボランティアフェスティバルへの協力などだ。

8月1日の迎え盆に「夢灯り」をやるうという案が女性メンバーから出た。みんな考え、漁協女性婦人部の人にも声を掛けて、集会所などに集まって作った。3年続いている。費用は小本地域振興協議会からろうそく代として8000円助成してもらい、そのほかからも協力してもらっている。

小本はもともと経済的に豊かなところだった。海も山も畑もあるので、それぞれが自分のことをやっていたら良かった。

家が残った人と壊れた人



撮影：箱石京子

*震災からの早期復興を祈念し、8月1日のお盆の迎え火に合わせ、『夢灯り』を町道小本中野線沿いに並べる

の二つに分かれるかと思ったが、家が壊れた人の中でも、再建した人と公営住宅に入る人で分かれてしまった。森の越の公営住宅に同居した人は岩泉（地区）の人になってしまい、小本には来なくなってしまった。それぞれに分かれた人たちをまとめるのがイベントの役割の一つだと思う。

■三陸縦貫道ができると――

若い人が減ってきてしまった。一度町の外に出ると戻ってこない。若い人の雇用を創設しようと会社を誘致しても、他の地域から雇うことになってしまう。先頭に立つてくれる人がいればみんなが協力してくれるので、リーダーシップを取れる人間を育てればその人が引っ張り上げてくれるだろう。

三陸縦貫道ができると大分変わると思う。素通りされてしまうかもしれないが、海があるのでモシ竜ロマンクルーズなどあれば高速道路を降りて立ち寄るだろう。

被災して更地になったところには何を作っても管理が大変なので、原っぱみたいに自然のまま残すのが良

いと思う。箱物（大きな建物）を造ると後が負担になってしまう。

高齢化に対する対策は何もせず、「自分でやっぺ」という方が良いと思う。役所へ要望するよりも自分でやるという気持ちの方が大事だと思う。高齢になって車が運転できなくなった時の対策が必要である。

新しい店で皆の生活を支える

（銜山口屋 取締役 山口 守さん）

■良いスタートが切れた

「再出発は、ここしかない」という状況だった。自分の土地と他の地権者から譲ってもらって、場所を決めることができた。土地を持つていたのが良かったと思う。平成26年6月に開店した。道路際でお客の来やすい場所だ。駐車場も確認でき、良いスタートが切れたと思っている。

今は毎日働けることが幸せで、何もなくじっとしていると



※乗船体験と被災地ガイドで、津波防災とともにモシ竜化石（日本で初めて発見された恐竜化石）が発見された地層や海の魅力などを伝えるクルーズ

やりきれなくなる。津波で店を失った時は、社長には失業保険が出ないので無事だった商品を仮設の青空市場で売らせてもらった。地域の人たちが温かい声とコーヒークレ、ありがたかったことを忘れられない。まだ仮設住宅に住んでいる。家が決めれば気持ちも落ち着くと思う。

■鮮魚も扱える

仮設に住んでいる人たちはここが近くて便利と、買い物に来てくれる。車での買い物が多い。工事関係者の売り上げが増えている。仕事帰りの人もいるので、夜8時まで店を開けている。



前より大きな店舗にできたので、扱う商品は変わらないうが、新鮮な魚を多く陳列できるようになり、生魚を扱えるようになった。カツオやサバを切り分けて売っている。

以前はウニの加工もやっていましたが、工場も設備機器も壊れ、

再開の工事が遅れている。漁師の人たちには時期ごとに獲れるものがあるので、加工の仕事が再開できれば、尚、望ましい。

■顔なじみのよさを活かして

コンビニエンスストアのローソンが近く、ローソンの方が買いやすいかもしれないが、こちらは顔なじみの良さがあり、コミュニケーションできる地元が強さがある。

仮設商店街はこちらに移る気配はないが、米屋、ラーメン屋、畳屋、サッシ屋が戻ってきた。道路がつながり、学校ができればまちの形ができて、三陸鉄道の小本駅周辺が中心街になるかもしれない。地元の人々で互い知恵を出し合い、小本を活性化させたい。

■みんなが働く場所を求めている

加工工場が復旧し、継続的にできる仕事が確保されれば、居住者も増え活気が出てくる。働く場所をみんなが欲しがっている。若い人が増えれば子どもも増える。

復興の役に立ちたい

ローソン小本店オーナー 中野 裕伸さん



採算を度外視して

震災前は宮古市で2店舗経営していたが、一軒は無事、一軒は店舗が全壊だった。自宅も流され、今も宮古市の仮設住宅に住んでいる。

出店については、岩泉町長からローソン本部に出店依頼があり、復興の工事の人たちの食事や買い物のために出店して欲しいという内容だった。小本での出店は予定していなかったが、役に立ちたかったので、採算を度外視して平成24年に出店した。

当初、地元の年配者や家族連れ、近くの工場の従業員が来てくれた。工場は24時間稼働なので夜間の休憩時間にも買いに来るお客さんもいる。最近では山口屋さんもお店し、工事関係者も増えてお客さんも多い。日用品、作業用品、アイス、ジュース、惣菜がよく売れているが、化粧品の動きは少し悪い感じがする。復興工事が一段落した後どうなるか気になる。

24時間、灯りのついている安心感

山口さんは仲間とは思っているがライバルでもある。山口屋さんは生鮮食品、野菜・魚などで、ローソンは日用品と飲み物、ケーキなどのデザートが主であり、山口屋さんが閉店した後から買い物に来るお客さんもいる。夜間の来店数は少ないが、24時間通して明かりがついていることは、売上げがどうこうではなく安心感につながっていると思う。

人口減少は小本だけではないが、残っていくためには魅力あるまちにすることで、外からどれだけ人が来るかを考える必要がある。長い目で見れば自然を生かした観光が必要だと思うが、復興が済んだら観光ですぐに集客というのは難しいので、今来ている人々を大事にしていくことが将来につながると思う。

三陸縦貫道ができればお客さんは通過してしまうかもしれない。岩泉町の頑張りにかかっているので協力していきたい。

高いところは津波の被害はなかったが、三鉄小本駅のところまで水が来た。水は怖いけど、盛り土をしたお客は不便に感じると思い盛り土はしていない。いつ津波が来るかと不安がある。昨日も地震があった

だが、てんでんこ(てんでんばらばら)に逃げることになっていく。パートさんが来たところだったので、注意報が出たらすぐに逃げるように伝えた。二度とあって欲しくないし、犠牲者も出したくない。

復興の牽引役として

三陸鉄道株式会社 旅客サービス部長 富手 淳さん



できるところからの運行再開

被災後は直ちに全列車を止め、3月13日、社長と二人で現場を見て歩いた。道路はがれきで埋まり、たくさんの人が線路を歩いていた。高台にある線路は津波をかぶらないで済んだ所も多く、そこが生活道路となっていた。

被害は大きかったが、津波に流された線路は実際のところ総延長の1割弱、距離的には約6km程度だった。そこでまず、動かせるところは動かそうと決めた。余震が頻繁に続くので、列車の速度を落として安全対策をとった。

今、沿線から見ていると、がれきはすべて片付いたが、やっとかさ上げが始まったくらいで、駅周辺の復興は遅れていて人がいない状況になっているところが多い。「昼の列車は超満員だが朝夕はパラパラ」という震災前との逆転現象が顕著で、それが一番の課題になっている。地元の固定的なお客さんがいない、ということで、小本のように「駅を中心としたまちづくり」を各市町村に願っている。

三陸鉄道は大切な観光資源

以前から「観光」、「交流人口の拡大」は事業の大きな柱だった。それが被災後の「フロントライン研修」や「震災学習列車」につながった。震災学習列車は、昨年は6,000人、今年は10,000人を超えるだろうといわれる活況を呈している。こうした分野に力を入れてお客さんを伸ばしていくのが今の活動の柱の一つだ。

団体ばかりでなく、個人の観光客をどう取り込むかも課題だ。「三陸鉄道に乗る」ということがツアーに入っていればお客さんが来る。三陸鉄道は観光の重要なツールの一つになっていることを地元の人あまり気付いていないのかもしれない。美しい景勝地を三陸鉄道でつないで、初めて「ああ面白い」ということが成立している。三陸鉄道が観光の資源になっていることを認識して欲しい。

小本駅を復興のモデルに！

小本駅の乗降客数は他の駅ほど減っていないのではないかと。小本駅の防災拠点施設ができることでここに観光センターも入ることになっているし、期待している。

地元の客の減少をどう戻すか、人口減少時代に戻せるものでもないかもしれないが、まちづくりと連携し、行政とも協力して少しでも努力したい。小本駅は復興モデルの一つとなるだろう。



撮影：長崎基一

第2章

明日の岩泉を担う

地震と津波は

平穏な日常を一変させた

その日から4年に近い歳月が流れ

小学生は中学生に

高校生や大学生は社会人になった

抱いていた夢や希望 志は変わったか

ふるさとへの思いは変わったか…

若い世代が描く

新しいふるさとの姿



若い世代が描く 新しい小本

被災を乗り越え

社会人となった若い世代の5人

伝統文化の継承、産業の活性化

歩いて楽しいまちづくりなど

無理をしない 自然体の発言の中に

新しいふるさとへの熱い思いがある

(平成 26 年 7 月 6 日に小本地区生活改善センターで実施)



1 将来像は変わったのか？

◆ 仕事は何をしていますか？
◆ 被災して自分自身の将来像は変わりましたか？

大場彬史さん —
あきひさ

もともと親の仕事を引き継ぐつもりだった

今は親の仕事の手伝いというか、後を継ぐということでガラス施工をしています。

震災の時は、学校の春休みで小本の実家に戻ってきていました。小本地区生活改善センターよりちょっと海の方に行ったところで小屋の解体をしていたら、

地震が来て避難所の方に向かって逃げました。

自宅は1mくらい浸水して住めなかつたので、最初はいとこの家にいたのですが、家族は仮設ができてからは仮設に入り、仮設に入っている間に自宅を直して今もそこに住んでいます。

自分は仮設ができる前に春休みが終わったので、八戸市の学校の寮に戻りました。学校を卒業してから仙台市で就職して2年いた後小本に戻ってきました。

自分の将来像ですが、元から親の仕事を引き継ぐっていう形ではありませんので、被災前と後でそんな

に変わらないですね。

小成未華さん

仕事の選択は変わらないの
ですが意識が変わったかな

岩泉町役場で働いています。平成26年で4年目です。

震災の時は、4月から岩泉町役場に採用が決まっていたので、もうアパートを引き払って小本に帰ってきていました。

ちょうど家にいる時に地震が来て、母と2人で避難所に逃げました。自宅は1mちよつと浸水したので避難所生活をしていたので



が、仮設ができる前に自宅を直して、今は自宅に住んでいます。家に戻ったのはゴールデンウィーク前だったと思います。

震災前から役場に就職が決まっていたのですが、その頃は漠然と「役場って安定しているし……」くらいの気持ちでいたのですが、役場職員が被災者の皆さんのために一生懸命働いているところを見て、自分の意識が変わったかなという風に思います。3月中はまだ職員になる前だったので危ない所には行きませんが、全国からいただいた支援物資の整理などのお手伝いをしました。私たちは時間通りに終われるのですが、職員は何時に帰っているのか分からない状態でした。



鈴木麻衣子さん

震災前も保育の仕事に
携わりたいたいと思っていた

岩泉町役場の臨時職員で、町立小本保育園で保育補助の仕事をしています。

震災当時は今とは別の岩泉の職場で働いていましたが、そこで地震に遭い、震災当日は職場の方の家に避難させていただいて、震災3日目に避難所だった龍泉洞温泉ホテルで家族と合流しました。携帯電話も繋がらなかったため、役場に行つて家族がどこに避難しているのか確認して合流しました。

自宅は2mほど浸水し、2カ月ほど仮設住宅に住んでその間に自宅を直して、今もそこに住んでいます。

震災前から将来は保育の仕事に携わりたいなと思っていて現在保育の仕事に就けているので、将来像も特に変わらないですね。

箱石純一さん——

みんな高齢者だったので
やっぱりこれとは思って戻った

岩泉町役場で働いています。2年目です。

震災の時は盛岡市にいて、その日に小本に戻ってくる予定だったので、ちょうど小本に戻ろうとした時に地震が来て、どうなっただかなと思いつつも大丈夫だろうと、そのまま盛岡市に1カ月くら



いい後小本に戻りました。

震災の夜に携帯電話がつかなくなり、家は2mくらい浸水して1階は全部ダメになったことを知りましたが、建物が残ったので今もそこに住んでいます。

大学を卒業したら小本に帰ってこようとは思っていたのですが、その時は別に何をやるうとは決めていませんでした。震災をきっかけにと言いますが、震災後の後片付けをしていますか、震災後には私と弟より年下の人がいなくて、みんな高齢者だったので「やっぱりこれは若い力が必要だろう」と

思って戻ってきました。役場の教育委員会で勤務していますが、岩泉町は本当に広いので町内の学校を歩き来するのにも時間がかかります。

鈴木善貴さん——

もともと地元で
就職したいと思っていた

小本支所の近くにある(株)エフビーという会社で働いています。本社は山田町にありますが工場が小本にあり、小本で就職したかったので決めました。技術職に就きたかったので、加工の仕事ができ



る工場が小本にあり良かったです。仕事に関しての将来像は震災後も変わりません。

2 小本における若い人の絆は？

◆*中野七頭舞などの伝統芸能と関わっていますか？
◆新しくできた絆はありますか？

大場さん——

中学校を卒業する時に
保存会から声が掛かって

七頭舞は小学校の4年生から6年生までは学校でやりますが、中学校からはやりたい人が集まってやります。保存会というのがあるて、中学校を卒業する時に保存会から「やらないか」という声が掛かって、そこで大人になってからも続けていく感じです。

定期的というわけではないです

自宅は2m浸水し仮設住宅に2カ月ほど住み、今は自宅を直して住んでいます。



が、地方などから公演依頼がある
と行って踊ります。冬の公演はそれほどないのですが、夏には毎週

か2週間に1回くらいあります。大体それぞれの人が決まっているので、ぶつつけ本番で踊ります。

箱石さん——

職場にも七頭舞保存会の
人がいる

七頭舞保存会では公演に行くメンバーはその時々で行ける人が行きます。自分は去年（平成25年）は3回か4回やったくらいです。道具は7種類ですので、最低7人いればできるかなと思います。

職場にも保存会の方がいるので
気軽に行くことができます。

ちよつと前まで小本には「小本さんさ」（伝統芸能）っていうのがあって、親の代（50代、60代）まではやっていたようですが、小本にも人がいなくなつたので、「小本さんさ」はやっていないですね。今は中学校の体育祭でやっているくらいだと思います。

*小本地区の郷土芸能。現在小本地区には中野七頭舞、中里七ツ舞、大牛内七ツ舞、中島七ツ舞の4つの郷土芸能がある

3 小本への愛着は？

◆岩泉町の中で「小本」にこだわっていますか？

◆小本で一番好きなどころ、ここが小本の特長だということころはどこですか？

鈴木(麻)さん――

「七頭舞が出演」と

書いてあれば「おっ！」

小本へのこだわりは強いですね。県内の情報誌とか見ている、例えばイベント情報に七頭舞が出演と書いてあれば「おっ！」とかわってやっぱり思います。もちろん龍泉洞の写真が載っているも「あー載ってる、載ってる」とは思いますが、やはり小本を思う気持ちの方が強いです。

この時期(7月)になると海に行きたいなって思うんですけど、小本の海はちよつと以前の形では

ないので、あまり近寄りたくないのが本音です。

砂浜がなくなっちゃったので、水切りで遊んだりもできなくなっちゃいました。海で遊ぶのが好きだったので残念です。

三陸鉄道も町内に駅があるのは小本だけなので、私の中では結構愛着が強いですね。中学生くらい

撮影：織笠清



まではよく乗りました。でも大人になってからはほとんど乗る機会がないです。

鈴木(善)さん――

ウニのことが放送で流れてくるともうその季節だなって

岩泉町で海があるのが小本だけなので、こだわりはいろいろあります。今の時期(7月)だとウニ漁があったりして、それが放送で流れてくると、あーもうその季節だなって思ったりします。あと、親戚付き合いなどでウニをもらったりすると、そういう季節が来たなっていうので、そういうところ以小本の良さを感じます。

「自分は小本出身だ」という気持ち強いです。

大場さん――

震災前の海とはちよつと変わって寂しいという感じ

自分も海が一番ですね。

撮影：田中道雄



広い所が海
しかなかった
ので、岩場で
探検したり、
浜で花火とか
しました。

震災前の海とはちよつと変わってしまつて、寂しいという感じはあります。「自分は小本出身」という気持ちは私も強いです。

小成さん――

海からの恩恵は
たくさんいただいている

私もやっぱり一番いいところは海かなと思います。頻繁に見に行ったりするわけではないのですが、父が漁師つていうこともあって海からの恩恵はたくさんいただいているのが大きいのかなと思います。

父は地震の時ちよつと船に乗っていたので、沖に逃げたんですよ。なので、船は助かったんですが、倉庫や道具は流されてしまいました。でも震災から1年しないで再

開したと思います。物を調達したりして、今は普通に仕事をするくらいにはなっています。
私も「小本出身」という意識が強いです。

4 どういう小本であつて欲しいか？

◆どんな小本になつて欲しいですか？

◆更地になつている被災地の利用方法はどうしたらよいでしょうか？

鈴木(善)さん――

若い人のイベントとして
七頭舞のようなつながりが
もつとあつた方がよい

七頭舞のようなつながりの部分
がもつとあつた方がよいのかな
と思います。自分は七頭舞保存会
に入つてないですが、中学生の時
小本のお祭りで、さんさ踊りに

立候補してやつたりしました。そういう部分でのつながりを中学生、高校生とか10代、20代前半の若い人に対して何かイベントとして盛り上げたいし、そういうのもつとあつた方がよいのかなと思いますね。

若い人が働く場所と、あとは小さい子どもたちが遊ぶ場所、公園

ができると思います。震災前は小学校に遊具があったので小さい子どもたちがそこで遊んだりしていましたが、今はそういうのがありません。小中学生とかが長期休みになると遊ぶ場所が近くにないので、会社にバスケットゴールがあるんですがそれを借りに来るんですよ。結局、ボールを貸してあげたり場所を貸してあげたりとなります。やはり、遊ぶ場所、例えば公園みたいなところが増えて、そこで小さい子どもたちが遊べると思います。公園みたいなところがあれば、若いお父さん、お母さんと子どもたちで遊びに行けたりできます。子どもたちが遊ぶ場所が増えて元気なまちになって欲しいです。

鈴木(麻)さん――

小本の良い所はどんどん発信して 歩いても楽しいまちに

新しい小本はつくられてはいませんが、建て替えられる小本駅(三陸鉄道)を中心に活性化してもらえればうれしいです。小・中学校も町内の学校が結構統合して減ってきていますが、本当はずっと無くさないで欲しいなと思います。小本小、小本中は震災前と場所が変わっても残ってもらえればいいと思います。9月の半ばくらいにやっていた小本八幡宮のお祭りも震災以降はあまり大々的にはやっていないですが、そういうのも復活して欲



しいです。震災前は「鮭まつり」といって小本駅の広場のところで開催していたのですが、今は「復興祈願おもと青空市」という名前になっていきます。前のような形に戻ってもらえればいいかなと思います。住みやすいまちになってくれるのが一番だと思います。小本の良い所はどんどん発信していいと思います。そういうことをきっかけに小本に住んでみたいというのもとてもいいと思います。若者がいつまでもたくさんいる場所であって欲しいなと思います。ここからローソンまでの1kmぐらいの距離でも車で行くような時代なので、ちょっと仕方ないかもしれないですけど、いっぱいいろいろな人が歩いているような活性化するようなまちづくりになればいい

いなと思います。今はあまり歩いている人がいなくて、歩いているのはおばあちゃんとかおじいちゃんとか車に乗らないような人たちがばかりなので、歩いても楽しいようなまちにしていきたいです。

小成さん――

震災前の普通の光景が戻ってくればいい 住みやすいまちのために病院を

学校の場所が変わったりしても震災前の普通の光景が戻ってくればいいと思いますね。今の時期になれば昼に「明日ウニの口開けです」というサイレンが流れて、次の日に海の方がにぎやかになって、みんなでウニをむいて、みたなのです。今はウニを捕りに行く人が以前より少ないのになって

撮影：金澤千鶴子



思います。そういう普通の光景が戻ってくればいいなと思います。小本駅も完成予定図を見るとすごく近代的で、なんか小本にそぐわないなと思うんですけど。そういうのは時代の流れとかあるので仕方ないかなと思うのですが、その他の部分では日常が戻ってくればいいなという風に思います。

住みやすいまちのために病院があればいいと思います。病院は震災前には一つ診療していたのですが閉まってしまいました。

被災跡地は、昔から地域に公園が無かったので、子どもが遊ぶ場所にするといいかなと思います。

大場さん――

岩泉地区くらいまで大きくして にぎやかになれば

今の小本の雰囲気結構好きです。せつかく港と鉄道と高速道路ができることになって人が集まる条件としては整っているので、古市とまではいかないですけど、岩泉地区くらいまでには小本を大きくして、人が集まってにぎやかになればいいかなと思います。

やはり雇用がなければ人も集まらないと思うので、(株)エフビーとか岩手アライ(株)とかの企業もあるので、頑張ってもらって雇用を生み出して欲しいなと思います。また昔のような活気のある小本になつていつて欲しいなと思います。

被災跡地は、津波というか震災の記録館的な感じのものができた

らしいのではないかと思います。あとは、七頭舞があるのでその練習の場所とかがあればいいです。

箱石さん――

同年代の人と遊びたい

活気ある小本地区になるといい

小本にももうちょっと働く場所があつたらいいのかな、とは思いますが。

いまの小本には、自分と同年代の若い人って本当に少ししかないんです。ふとしたときには寂しさを感じるので、できればことあるごとに飲み会をできるくらいに友達がいてくれればなあと思ったりもします。学生の時とかにドライプをしてみたり、スポーツとかをして遊んでいたような友達は、ほとんど地元から出て行ってし

まったので、できれば同年代と遊びたいと思います。

また、昭和の頃のような活気が小本に戻ってきてくれないかな？とも思います。震災後に発刊された「いわて地誌アーカイブ」岩泉・海と小本」（岩手県立大学総合政策学部編集）の中に、国道45号が開通したときや、港として栄えていたころの小本の写真が多く載っていて、昔は小本もすごくにぎわっていたということを改めて知りました。それまでは親戚や親が「昔は小本にも飲み屋はもちろん、映画館があつたり、大きな旅館があつたり、いろいろな娯楽施設があつたんだ。」と言っていたのを、「本当かよ?」とかなり疑って聞いていましたけど、証拠写真を見たので、今は信じています。そ

のころのことは知りませんが、活気にあふれていて、たくさんの方が交流できるような小本地区になればいいなあと思います。

あと、跡地の利用についてですが、今のままでもいいような気もします。ただ、人が減ったためか、小本の街中でも犬猫以外の動物を見るが増えました。この間はカモシカが小本の街中において、本当にびっくりしました。そこだけはちよつと怖いので勘弁して欲しいですが……。



撮影：田中道雄

発言！

夢と希望と志と——中学生たちの意見

仮校舎での歲月
新校舎への期待
小本の魅力
それぞれの将来…
中学生6人の発言から見る
小本の復興と将来



(平成26年9月12日に岩泉町立小本中学校仮設校舎で実施)

山口有稀音^{あまね}さん（3年）——
七頭舞は一人ひとりが大きく踊って、しなやかに踊るところがすごく魅力的。踊りだけでなく伝統を受け継ぐという気持ちを伝えていく

今は小本仮設住宅に住んでいます。

仮設校舎に通うようになって、自分の学校があることがうれしかった。震災後初めて大牛内分校の人と一緒に体育祭ができたこともうれしかったです。自分たちは卒業してしまうので新校舎に通えないと思いますが、自分たちが要望したことが入ってくれば良いなあと思います。例えば、多目的ルームが欲しいとか、水道をもっと多くして欲しいとか些細なことも要望しました。音楽室を広くして欲しいとか、テニスコートが欲

しいなどです。

七頭舞は小本の伝統芸能でとても大切なものなので、下級生には踊りだけでなく、伝統を受け継ぐという気持ちを伝えていくようにしています。

一人ひとりが大きく踊って、しなやかに踊るところがすごく魅力です。「小鳥」と言って扇子を使う踊りは女子が踊ることが多いです。全国中学校総合文化祭で全国の皆さんに七頭舞を披露できるのはうれしいです。

小本の良いところは地域の方々が優しく温かいことです。



※平成26年12月に沖縄県で開催される第14回全国中学校総合文化祭に、小本中学校は岩手県代表として「中野七頭舞」で参加した

龍甲岩りゅうがいわは晴れているとすごくきれいだし、浜の風が気持ちいい。

活気のある小本にして欲しいので、観光客を呼んだりして活性化につなげて欲しい。今やっているモシ竜口マングルズなど続けて欲しいです。将来は小本にいて、震災のことを県外の人に伝えたいです。



小本小学校にプールができて、あまり使わないうちに震災で使えなくなってしまうので、新しい校舎にプールができれば、子どもたちも使えていいと思います。

三浦愛海さん（1年）――

震災前のように
笑顔や笑い声があふれる
まちになつて欲しい

私は被災していないので、そのままの住まいです。

仮設校舎に通ってさまざまな行事を大牛内分校の子と一緒にできて、例えば、このの校庭で運動会が一緒にできたのが良かったです。

新校舎は、4階建てなことや体育館が広くなるのを説明会で



聞いているので、期待しています。

七頭舞は踊っている私たちがけでなく、見ている人にも元気を与えられるので、そこに魅力を感じています。自分もとても楽しく思えるし、地域の人も元気になつてくれます。

小本の良いところは、山がたくさんあり、空気もきれい。地域の人の明るさや優しさが好きです。

好きな場所は海です。

震災前の小本のように笑顔や笑い声があふれるまちになつて欲しい。

中野七頭舞などの中学生も取り組める活動をしていきたいです。将来は小本で、海が近いので漁業関係の仕事につけたらと思います。



大牛内分校仮設校舎移転後に行われた運動会（平成25年5月）



伊藤航大さん（1年） ——
自然がたくさんあり 震災後もみんなが支え合っているところが好き

今は被災前に住んでいた土地ではなく、中野地区に家を新築して住んでいます。

震災前は（小本小学校）大牛内分校とあまり授業を一緒にすることがなかったですが、仮設校舎に入って、分校の人たちと行事を一緒にして交流ができて良かったです。

新校舎（平成28年3月完成予定）の説明



会などで、特別教室が増えたり、体育館が大

きくなると聞いたのでいいと思います。仮設校舎には美術室や特別室がないので、そこを増やして欲しいです。

七頭舞はみんなに元気や活力を与えられるので、僕はそういうところを受け継いでいきたいです。

小本は自然がたくさんあり、震災後もみんなが支え合っているところがとても好きです。みんなが優しく、初めて来た人もすぐなじめるところがあります。小本が震災前より活気あふれるまちななるよう、自分のできることを精いっぱい頑張りたいです。

避難所でボランティア活動をしている人に助けられたので、自分もボランティアをしていきたいと思っています。小本で役に立つような仕事をしていきたいです。



撮影：田中道雄

三浦望^{さん}（2年） —— 小本にいて 震災のことを県外の人に伝えたい

津波の被害はないので、中野地区でそのままの住まいです。

仮設校舎に通って、最初は大内分校の子と仲良しになる方法が分からなかったけれど、笑顔で接してくれて、遊びにも来てくれたので良かったと思います。

新校舎は、私たちがいる間に完成するかどうか分かりませんが、美術室や理科室などの特別教室を広くして、スペースが不自由なく使えるようにして欲しいと期待しています。

七頭舞は、踊っていると気持ちが明るくなり、一体感を感じて、見ている人にも勇気づけられる踊



りだと思っています。踊っている人、囃子、見ている人たち、みんなの絆が深まります。

小本の良いところは、自然が多く、海があつてきれいなところです。

好きな場所は海です。

地域の人たちが手を取り合つて、助け合いを大事にしたいって欲しいです。私は介護の仕事で助けています。

将来は小本に残つて、震災のことを県外の人に伝えていきたいです。

今、（被災したため）使われていない小本小学校は資料館になったらいいと思います。

佐々木二千斗さん（2年） —— 遠くからでも 小本のまちに貢献できることをしたい



被災して岩泉地区の仮設に入り、今は三陸鉄道小本駅近くの災害公営住宅に住んでいます。

仮設校舎に通って心に残っていることは、有名な人やボランティアの人がたくさん学校に来てくれたことです。特に印象に残っているのはテレビ番組の「志村どうぶつ園」です。



2年生なので（平成28年3月完成予定の）新校舎に入れるかど

うか微妙なところなのですが、新校舎の説明会に参加して、4階建てなのにびっくり。設備が良く広さも良いと思いました。

七頭舞は小学校から続けてやってきたので、今でも町の郷土芸能祭や演芸会で披露する機会がありました。全国中学校総合文化祭という大きな舞台で踊るのは初めてで緊張しています。七頭舞は小本を代表するものの一つで自分たちにとって大切なものです。今まで続けてきた七頭舞を全国の皆さんに披露できるのがうれしいです。

小本の良いところは皆が活気にあふれているところ。時々小本で祭りが開かれると人がいっぱい来て活気があって好きです。活気があって誰にとっても住みやすいまちであって欲しい。

将来的にさまざまなところで、小本のまちに関わっていききたいです。ボランティア活動もしていきたい。技術的な物づくりの仕事もしたいので、都会の方が学べると

撮影：熊谷貴理子



思うから、都会に出てみたいと思っています。遠くからでも小本のまちに貢献できることをしたいです。

竹花侑恭さん（3年）——

七頭舞が復活した時はすごくうれしかった
後輩にもちゃんと教えて

中野七頭舞の存在をみんなに知らせたい



津波の被害を受けたので、おばあちゃんが建てた中野地区の家に住んでいます。

岩泉小学校に通っていた時は岩泉地区の人たちが良くしてくれましたので、何も不自由はなかったのですが、大牛内分校内の仮設校舎に移って自分たちのためだけの学校があることが安心できました。体育祭とか思い切りできたのがうれしかったです。

卒業するため、自分は新校舎に入れないのですが、1年生の時から学校を造ることに関わってきたので、校庭が広がったり、小学校

と合同の教室もできてうれしかったです。後輩たちが不自由なく過ごせる学校になって楽しい思い出をつくれる学校になって欲しいです。

小学校に入る前の保育園の時も七頭舞を見てきたので、小学校4年生になって、学校の授業で始められた時は、やっとできるようになったと思います。ずっと教わってきたので、震災後できなくなり、寂しい感じになりました。復活した時（平成24年）は、中学1年でしたがすごくうれしかったです。小本だけの七頭舞なので、今度は全国中学校総合文化祭で全国のみ

んなに見せることができ、それも自分たちが伝えられるのがうれしいです。後輩にもちゃんと教えて中野七頭舞の存在をみんなに知らせたいです。12月に全国中学校総合文化祭に出演するので、今は毎週水曜日だけ練習していますが、本番が近づくとつれ放課後毎日練習になると思います。

七頭舞は自分たちをお客さんに知ってもらう方法だと思います。自分たち、踊っている人とお客さんとをつなげるものだと思います。

小本のいいところは、空気がきれいで美味しいことと、一人ひとりのまちの人の表情が豊かで、すぐ笑顔で接するところです。好きな場所は、単純になります。学校が好きです。同年代の子どもが集

まっってワイワイできるのがいいです。

まちはそこに住んでいる人がずーっと笑顔でいられるのが一番だと思います。些細なことでも小本が笑顔でいられるよう努力したいです。住みよいまちにするには病院も必要だし、三陸鉄道小本駅も新しくなるので、移動手段などお年寄りも子どもも気軽に使える場所を増やしていきたいです。公園とかもあつた方がいいです。

今ちようど進路で悩んでいるのですが、ふるさとの自然を守るためにできることをやれたらいいです。たぶん将来も岩手県内にいると思うので、宮古市とか、近くていつでも帰って来られるところで仕事ができたらいいなと思っています。

苦しいときこそ頑張ろう、と踊る七頭舞

中野七頭舞保存会会長 阿部一雄さん



各地区の踊りを大切に

中野七頭舞は、天保時代に神楽太夫が創始したと伝えられています。舞は、二人一組で7種類の踊りがあり、荒地を耕して田畑を造り、秋に収穫するというストーリーになっています。

郷土芸能はどれもそうですが、中野七頭舞も興隆、衰退があり、今の保存会は昭和51年に発足しています。当時の会員で今も活動しているのは山本恒喜さんと私だけです。会員は小本だけでなく、盛岡市や東京で仕事をしている仲間など全国にいます。

小本小学校が七頭舞を取り入れるようになったのは昭和53年からです。当時、小本小学校に赴任してきた先生が七頭舞に感動し、その熱意でクラブ活動が始まり、やがて授業になりました。山本さんも私も1時間、2時間と仕事の（次頁に続く）



全国中学校総合文化祭（平成26年12月）

合間をぬって指導し、子どもたちも6年生が4年生に教えるなどして継承しています。

小本には、中野七頭舞だけでなく、中里七ツ舞、大牛内七ツ舞、中島七ツ舞があります。今は小学校が統合されて小本小学校一つになりましたが、児童はそれぞれ自分たちが住む集落に伝承されている七頭舞（七ツ舞）に取り組みます。けれども子どもの数が減っているの、それぞれの舞を踊ることがだんだんと難しくなっています。

中学校では中野七頭舞を踊ります。今年（平成26年）、全国中学校総合文化祭に出ることが決まり沖縄に行きますが、私は子どもたちに、「ただ踊れて良かっただけではなく、歴史も覚えなければいけないよ」と話しました。各地区の踊りも理解して大切にしたいと思っています。

岩泉高校も平成元年から郷土芸能同好会で中野七頭舞を踊っています。

踊ることで元気になり 皆さんへの励みになる

私は今の保存会ができてからずっと活動を続けていますが、「無くせない、絶やせない」という思いだけで続けてきたように思います。

震災では、家が流されたり衣装が流されたりした会員もあり、中には親御さんかもしれません、衣装だけは持って逃げたという会員もいました。また七頭舞を通して出会った皆さんから電話をいただいたり、東京から車で支援物資を運んでくれたりといろいろな支援をいただき、すごくありがたかったです。そして「全国の人や被災した人たちに元気な姿を見せて踊ってください」という依頼があり、震災後の2年間はとにかくあちこちで公演しました。踊ることで我々も元気になれるし、津波があっても郷土芸能を続けて頑張っているところを見せることがみんなの励みになると思い、一生懸命踊りました。昔も、コメが採れないときとか、苦しいときこそみんなで頑張ろうと集まって踊った七頭舞ではないかと思っています。だから今こそ頑張らないといけません。だから今こそ頑張らないと思わないと思うのです。



左側が阿部さん
(平成24年 復興祈願おもと青空市)

○岩泉高校郷土芸能同好会は第38回全国高等学校総合文化祭に中野七頭舞で出場し、郷土芸能部門の優秀賞（文化庁長官賞）を受賞しました。

○小本中学校は平成26年12月に沖縄県で開催される第14回全国中学校総合文化祭に出場しました。

○岩泉町には、中野七頭舞のほかに、長田剣舞、二升石黒森流鹿踊附森山流大念佛、向町さんさ踊り、中里七ツ舞、中島七ツ舞、大牛内七ツ舞、安家ナチャトヤラ、釜津田鹿踊などの郷土芸能があります。

第3章

岩泉の産業

農業 漁業 酪農 製造業 工業 観光業
第一次産業から先端産業まで
岩泉には さまざまな産業がそろって
この町を特徴づけている

3・11の地震と津波は
この産業にも大きな影響を及ぼした
お客さんの減少 流通経路の遮断
家畜に食べさせる餌の入手困難など
直接的 間接的な被害があった

被災から4年……

後継者が出ることを楽しみに頑張る

結果が目に見える仕事である楽しみに賭ける

伝統を守りながらも

時代に合った新しい形を模索する



定置網漁業で再出発

漁業者 大町正明さん、雅宏さん

父、正明さんの話――

孫のみうちちゃんと避難して

息子とワカメ・昆布の養殖漁業をしていた。震災の年は例年より早く漁に備えてロープや浮き玉などを岸壁に出していた。息子のためにエンジンや道具を新しくし浮き玉も仕入れていたが、津波が来る2、3日前に準備が終わっていたので、結局全部流されてしまった。まるで津波に流されるために準備していたようなものだった。



地震が来た時、息子の嫁は盛岡市、母は乙茂地区にある介護老人保健施設「ふれんどりー岩泉」のデイサービスに行っていた。私と息子は家の倉庫にいて、孫のみうちちゃんと小本小学校の体育館に避難したが、

孫に「じいちゃん逃げよ」と言われ小学校の校舎脇にある避難階段を上り、直後に津波が来た。息子は消防団員なので水門を閉めに出ていった。家は1階が流されたが2階は無事だった。けれども、食事に困ったので孫を預かってもらいに避難場所となっていた「ふれんどりー岩泉」に行った。

仮設住宅ができてからは小本の仮設住宅に入った。仮設住宅を出た後のことについて、息子の嫁は資金を心配して家を建てるのではなく災害公営住宅に入ると言ったが、私が集団移転地に家を建てることを選んだ。

養殖漁業のほうは、私が病気になってしまったため新たに漁具をそろえることなく廃業した。小本の海は外洋に面していて波風が激しく、体力的にも続けるのは厳しかった。

長男、雅宏さんの話――

漁協は安定していることもあって

高校卒業後東京に10年いたが、母親が病気になり、28歳の時小本に戻ってきた。それから10年ぐらい父

親とワカメと昆布の養殖をしていた。津波の後、知り合いに漁協（小本浜漁業協同組合）の定置網漁に携わらないかと声を掛けてもらった。養殖を続けるかどうか悩んだが、父親が病気になるってしまい、自分一人ではやっていく自信がなかったので漁協に入ることにした。漁協は家からも近く、収入も安定している。漁協に入ったのは津波の年の4月から5月頃だった。漁のある日は朝4時に出港し、昼ぐらいまで仕事をする。出勤は毎日で日曜が休みになる。春はマス、夏はサバ・ワラサ、秋はサケがとれる。2月、3月は漁がなく休みになる。定置網漁船の乗組員は60代前半から20代までいる。

漁業の発展に若い力を！

漁業者 三浦善生さん

父と二人で

大学へ入った時に仙台市へ行き、そこで就職して8年半ほど小本を離れていた。今は漁船漁業を父と2人でやっている。津波の時は家の裏にいたが、父

親は何も言わずに船を沖に出した。自分は消防団に入っているので屯所に向かった。沖に船の明かりが10か11、等間隔に並んで見えていた。避難した船同士では無線で連絡が取れていたが、船ではみんな寝ないで起きていたようだ。父親たちは沖で2泊して、流れているロープなどの漁具を避けながら、3日目の朝、小さい船から一列に並んで帰ってきた。全員の流された魚具を回収するのにゴールデンウイークまでかかった。うちは倉庫が津波で波を少しかぶったが、他と比べると被害が少なかった。ゴールデンウイーク明けに漁を再開した。

忙しい

漁は、1月下旬の刺網漁で毛ガニ、カレイを、4月末、5月頭から9月頭までタコのかご漁、6月

8月にウニ漁が入ってくる。

11月から12月は秋鮭とアワビが採れる。タコ漁は、この辺は水ダコだが、夜中の3〜4時、一番早い時などは午前1



時半に出港して、宮古市の市場に間に合うように11時前後に戻ってトラックに荷揚げする。午後はタコ漁の籠の修理や次の日の準備などをしている。週末は釣り船を営業しており、静岡県や東京都、盛岡市からお客さんがみえる。

結果が目に見えるのが漁業

大学を出て農業をやっている人は結構いるが、漁業をやる人はほとんど聞いたことがない。漁業は体力もいるが、権利関係などが複雑で新規ではやりづらい。何も知らないところから始めるとなると農業より漁業の方が厳しいと思う。サラリーマンの時と比べると、漁業は良かった、悪かったという結果が見た目で分かる。でも、サラリーマンから漁業に転職して良かったかどうかはまだ分からない。漁業者を増やすには、若い人が新しく漁業を始められるような環境をつくるべきだし、収入も上げていかなければならないと思う。今、自分の一番の課題はお嫁さんを見つけることだ。

次世代に引き継ぎたい岩泉の酪農

岩泉乳業㈱に生乳を提供

阿部隆一さん

生まれ育った愛着ある地で

岩泉町に入植が始まって8年後ぐらいに、父親が山のてっぺんで誰も入らなかったこの地（岩泉沢中）に入り、果樹（りんご）と酪農を始めた。自分ここで生まれ育ったので家を継ぐというよりも、自然にここにいたいと思うようになっていた。山のてっぺんなので学校に通うのが大変だった。小学校は2kmぐらい下った所に分校*があり歩いて通った。中学校は8km離れていたが、自転車だと帰りが登り道になって大変なので走って通った。父親が亡くなり、果樹と酪農の両方を一人でやるのは大変なので、酪農だけの専業になった。現在70頭（親45頭、子25頭）の牛を妻と2人で飼育し、母親が子牛のえさやりを手伝ってくれている。生乳の衛生管理は「基本に忠実」をモットーに、病気に気を付け



*岩泉小学校沢中分校。昭和46年に廃校



ている。一般の人にも牛舎などを開放して見てもらいたいが、牛舎に病原菌が持ち込まれる危険があるのでできない。

震災の被害は少なかった

自分のところは震災当日の被害はほとんどなかったが、岩泉乳業(株)の工場が重油が届かないため稼働できなかったもので、4日分くらいの生乳を捨てた。工場が動いたのは5日目くらいからだ。餌は震災の翌日にトラック一台分の飼料を入れる予定になっていて、業者と連絡が取れず心配したが、夕方には満杯に入れてくれたので半月分を確保できた。

震災直後は、消防団の一員として人探しや消火活動をしたが、牛がいるので現地と自宅を行ったり来たりしていた。ガソリンはな

かったが軽油があったので、ダンプトラックで移動していた。

震災当時は雪が残って気が付かなかったが、春になったら畑に長さ20m、幅30cm、深さ70cmの穴が開いていて驚いた。

後継者が出てくることを楽しみに

子どもは娘ばかりで、みんな嫁に行ってしまったので後継者をどうするかが問題だ。世襲制ではなく、よその人を入れる体制とか、会社組織などいろいろ考えている。少しでも関心を持ってくれる人がいれば良いのだが、何がいかまだ分からない。

現在、岩泉乳業(株)に出荷している酪農業者は35軒で、そのうち酪農専業農家は15軒くらいだ。岩泉乳業(株)が大きくなるためには農家が頑張らなくてはと思う。酪農を希望する若い人を横からサポートしたい。酪農は厳しいところもあるが楽しい。誰かが継いでくれる日まで頑張りたい。岩泉乳業(株)とタッグを組んで、この地域だけの生乳を使った乳製品で差別化を図りたいと思う。

半農半工を目指して

㈱エフビー岩泉工場 工場長 前川勉さん

三陸鉄道の小本駅に近い

(株)エフビーの岩泉工場は平成20年に開設した。田鎖巖会長が「農家の長男は家を継がなければならぬが、この地域は農業だけで生計を立てることが難しいので、農業もやりながら工場で働く半農半工に適している」と考え、工場を建てることになった。工場場所は、三陸鉄道の小本駅に近く田野畑村からも通勤可能ということでこの土地が選ばれた。小本は岩泉町の中で一番雪が少ない地域なので冬は助かるし、夏は浜からの風が涼しい。

工場では、主に携帯電話やパソコンに使われるコネクタを生産している。



1週間休業した

震災の時は、周りの田んぼより地盤が2m高いので津波の被害はなかった。山田町に

ある本社も直接の被害はなかったが、社員の中には家族が亡くなったたり家が流されるなどの被害があった。本社の工場は1週間以上避難場所になった。岩泉工場も1週間休業した。ガソリンも入ってこないで通勤もできなくなった。余震が続きそのたびに津波を心配した。今でも地震が来るとテレビで津波の確認をする。津波が来ないと分かるとほっとする。

地元の人とも顔なじみになってきた

平成20年の工場開設時に、私その他に2人が本社から岩泉工場に来た。岩泉工場の従業員は7人で、若手は20代、一番年上が私(60代)になる。出身は、私が有芸地区で、小本地区が2人、釜津田地区が1人、小川地区が1人、田野畑村が2人だ。本社の従業員は276人である。



開設当初は地元の人から「何の工場か」とよく聞かれた。地元の人とは話をするようにしているし、子どもたちの社会科見学や町会の皆さんの工場見学なども受け入れている。会長の意向で、冬場以外は月に1回、勤務時間内に工場から海岸のほうまで、道路沿いの空き缶拾いをずつとやっている。だんだんと地元の人とも顔なじみになり、例えば「いつもありがとうございます」と言われる。お陰さまで岩泉町公衆衛生組合連合会から表彰状もいただいた。

家業との両立を目指している

半農半工を目指しているが、従業員の中には農業や酪農をしながら通勤するのが大変で退職せざるを得ない人もいる。金型加工がメインなので一人前になるには何年もかかる。途中で辞めてしまっただけもったいない。機械を導入することで労働の軽減を図っている。できるだけ家業との両立ができるようにしたい。

携帯電話関係の生産が多く、これからも重要は増えていくと思う。日本の金型業界は製造から組み立

てまでやっており技術的には信頼されているが、コストの安い中国に需要をとられてしまっている。常に一歩先を進まないと中国に追いつかれてしまう。

これからも高齢者と共に

小規模多機能センターあお空センター長 腹子晴美さん

辛い記憶も時間が解決してくれる

(有)介護施設あお空(大久保博代表取締役、宮古市)が小本に「小規模多機能センターあお空」、「グループホーム小本」、「メゾンおもと」を開所したのは、震災直前の平成23年2月21日だった。利用者は全部で28人だが、小本地区の利用者は少なく、大川地区など他の地域からの利用者がほとんどである。岩泉町は雪が多いことなどから通所が不便なため、隣



にアパートを建てて毎日介護サービスを提供している。スタッフは26人である。

震災の時は、チリ地震(昭和35年5月)を経験していた

スタッフがいたため、混乱なくスムーズに第一避難所
に逃げる事ができた。入所者の搬送にはスタッフの
車も使った。3カ所に避難し、最後は「ふれんどりー
岩泉」（介護老人保健施設）に間借りさせていただ
いが、役場の人や町長さんが1日1回は顔を出して
くれてとても心強かった。スタッフの中には家を流
された人もいたり、ガンリンがなく通勤にも時間か
かかったりなどで、シフトもいつものようには組めな
かった。地震でボイラーのガスが止まり水道管が凍っ
てしまったため、1カ月近く施設を使用できなかつ
た。ガス屋さん(田老ガス水道設備)も流されてしまっ
たが、やっと来てもらって
再開することができた。本
部が被災してしまったので
本部の利用者7、8人を1
カ月間受け入れた。介護保
険制度では住民と市町村が
被保険者と保険者の関係に
あるが、市町村を超えて受
け入れることに宮古市も岩



地域で支え合って暮らす仕組みを

役場町民課長寿支援室長 佐藤哲也



岩泉町の高齢化率は、県内でも上位に位置し、近い将来40%を超えることが予測されている。高齢化がもたらす問題として、独居（一人暮らし）の問題がある。一人で暮らすことには、さまざまなリスクがあるので、高齢者の皆さんが、一人で孤立しないように、地域で支え合って暮らしていける仕組みづくりを検討している。立派なデイサービスセンターでなくてもよいので、みんなが集える拠点を作り、そこで介護予防や交流を展開することが必要だと考える。町内の各地区に拠点を作ることで、町内全体で同じような取組を展開できるのではとも考える。また、現在の介護サービスは、デイサービス（通所介護）などが中心であるが、今後は、利用者の方に出向くかたちの訪問型のサービスを広げていくべきだと考える。

各地区の振興協議会や関係機関（消防、病院、介護事業所など）と連携した高齢者の見守りを充実させていきたい。

泉町も理解を示してくださった。

震災直後は余震のたびに警報が出て動揺したが、今では地震があつてもみんな自主的に避難に備えることができています。時間の経過とともに辛い記憶もだんだんと薄れているようだ。

三陸北縦貫道路の工事が始まり、近くに店舗もきて、住宅もでき始めた。にぎやかに復興を感じる。私たちにも便利になったと感じている。

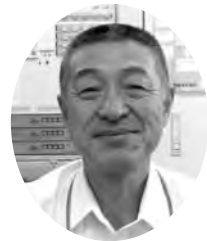
この施設は拡充などの計画はないが、高齢者は増えるので今後のことは町とともに考えていきたいと思う。

「龍泉洞まつり」で地域を元気に！

龍泉洞事務所 所長 武田保男

ほとんど揺れを感じなかった

落石などの被害はなかったが、洞内の地底湖の水位が2m位下がって水が濁り、元の透明度に戻るのに2カ月以上かかった。震災の年は、1月から洞内の照明をLEDに交換する工事のために休洞して



いた。洞内には作業員しかいなかったが、ほとんど揺れを感じず、水面の揺れに「もしかして地震か」という程度で、洞内から出てきて津波の被害を知った時は仰天したようだ。

回復しつつある入洞者数

震災の年の4月27日から営業を再開した。それまで年間20万人位の入洞者だったが、平成23年は3分の1以下に減ってしまった。平成25年の入洞者は震災前の8割まで回復し、ありがたい限りだ。平成26年は7月現在で前年より2割程度増えており、このまま順調に伸びれば17〜18万人まで回復するのではないかと期待している。

伝統ある「龍泉洞まつり」と

新たに始まった夏まつり・秋まつり

集客は龍泉洞の入洞者だけでなく祭りでも集客しており、現在、「龍泉洞」の名がつく祭りは4つある。



ほか、景品つき縁起餅まきなどのイベントがある。

震災後の客数の落込みを回復する狙いで、平成24年から「龍泉洞夏まつり」と「龍泉洞秋まつり」を始めた。夏まつりのメインは短角牛の焼肉で好評だった。秋まつりは岩泉町のマツタケ、山田町の牡蠣がメインで、こちらも大好評だった。

1月には平成26年に27回目を迎える「龍泉洞みずまつり」もある。五穀豊穡を祈る小正月の時期に、豊かな水に感謝し水資源の永続を願い、水を育む森を大切にすることを子孫に伝える祭りで、龍泉洞の水で身を清めた搬送隊による御水渡りの儀や巫女舞いなどがある。

若い人の集客を図りたい

季節ごとのお祭り目当てのお客さんも増えているが、旅行の形態が団体旅行から個人の旅行に変わってきているので、バスが何台も連なって来るといのはなかなかなく、テレビやポスターを見て来た人や町内や県内から来る客が多い。修学旅行は、東北や北海道の中学生、高校生の旅行が復活している。

被災地ツアーや三陸鉄道の全線開通で、被災地を訪れた人が龍泉洞に足を運んでくれていることもあるが、それが落ち着いたらどうなるか、一抹の不安はある。

国際化に備えて英語、韓国語、中国語のパンフレットも準備している。

ライトに照らされ、岩肌に「ハート」の形が浮ぶ



平成26年3月には、「龍泉洞」と町内うれいら商店街にある「初恋水・百恋水」が、「恋人の聖地」(＝デートスポット、プロポーズにふさわしいスポット)として認定され、テレビで放送された。うまく活用して今後は若い人の集客を図りたい。

※ うれいら商店街にある水場。「冷たい」ということを、岩泉では「はっこい(ひゃっこい)」と言う

※ NPO 法人地域活性化支援センター(静岡市)が地域活性化と少子化対策への貢献の両立を図るため、全国の観光地域の中からとして選出・認定している

第4章

岩泉・小本のいま——その3

まちの住み手がまちの復興過程を記録する——

言うは易く、実行は大変だ

でも フォトグラフィアだから！

へこたれないで記録を続けている

買い物かごの中に 軽トラの助手席に

いつもカメラを持ち歩く

見慣れているふるさとの魅力の新しい発見もあった

表現することがこんなにも楽しく

生きる力につながることも分かった

経験——日々の喜びや悲しみの記録を通して

今、私たちは 明日の岩泉の友人たちと時空間を共有する



1 「フォトグラフィア」からのメッセージ

—「だれでもフォトグラフィア」経緯

「だれでもフォトグラフィア」は、平成23年11月から活動を開始した。東日本大震災による大津波で被災して仮設住宅に住む人を中心に、町民が、プロカメラマンの橋本照嵩氏の指導を受けながら、町の被災からの復興過程を自分たちの撮影した写真で記録していこうとする活動で、現在も進行中である。住民自らが、撮影を通じて「それぞれの今」を表現することで、被災から復興に至る長い苦しい期間を強く受け止め、充実して過ごし、復興への力を養うことも目的にしている。始まりは、被災した住民からの「ボランティアの支援をただ受け取るだけでなく、自分たちも積極的にやれることがないか」という言葉を受けて、UFA JAPON（ユイファ・ジャポン＝国際女性建築家会議日本支部）が提案したもので、UFA JAPONが主宰している。活動には、岩泉町役場小本支所、小本地域振興協議会が協力し、三陸鉄道株式会社、富士フィルム株式会社、社会福祉法人中央共同募金会などからも支援を受けている。

第4章は、次のように構成されている。

「1 フォトグラフィア」からのメッセージでは、平成25年12月以降、平成26年11月までの期間に合評会に写真を提出した人の写真から、一人1ページ分を選び、それぞれページに撮影者のメッセージを入れた。

「2 岩泉・小本のいま」では、同期間に撮影された写真の中から、フォトグラフィア参加者がふるさとの風景として考える写真を中心に掲載した。

「3 復興を撮る」撮影会には平成26年9月14日に、第3回の撮影会として、テーマをタイトルのように決め、漁港を中心に撮影したときの写真を集めた。復興工事の写真はもちろんだが、漁港に対する誇りや期待も写し撮られている。

写真の選択は、いずれも橋本照嵩カメラマンが中心になり、撮影者の意向を尊重している。

年	月日	内容〈カッコ内は会場〉
平成23年	11.17	「だれでもフォトグラフィア」プロジェクト提案：参加者募集開始
	12.2	第1回合評会（「だれでもフォトグラフィア」についての説明会）〈小本仮設団地集会所〉
平成24年	1.30	カメラ回収
	3.11～	第1回写真展「春遠からじ」〈三陸鉄道小本駅構内〉
	5.11	第2回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	5.12	第1回撮影会 テーマ：「小本駅周辺にて」〈小本仮設団地～小本駅周辺〉
	9.1	第3回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
平成25年	12.1	第4回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	3.9	第5回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	3.10～	第2回写真展「春遠からじ」〈三陸鉄道小本駅構内〉
平成26年	5.10～15	ヴァージニア工科大学における写真展〈VT Cowgill-hall〉
	6.29	第6回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	9.4～10.23	東京都中央区立女性センターにおける写真展「春遠からじ」〈東京都中央区立女性センター〉

年	月日	内容〈カッコ内は会場〉
平成25年	9.20	第7回合評会（記録集のための座談会もあり）〈小本仮設団地集会所〉
	12.7	第8回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	12.8	第2回撮影会 テーマ：「お世話になった仮設」〈小本仮設団地周辺〉
平成26年	3.9～	第3回写真展「春遠からじ」〈三陸鉄道小本駅構内〉
	3.11～4.30	東京都中央区立女性センターにおける写真展〈東京都中央区立女性センター〉
	5.24	第9回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	9.13	第10回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	9.14	第3回撮影会 テーマ：「復興を撮る」〈漁港周辺〉
平成27年	10.24～26	ヴァージニア工科大学における写真展（その2）〈VT Cowgill-hall〉
	11.29	第11回合評会 〈小本仮設団地集会所〉
	3.8～	第4回写真展「春遠からじ」オープン〈三陸鉄道小本駅構内〉



阿部範子さん

写真の流出で、写真は小さい頃の環境や思い出を引き出すものであったことに気づきました。撮影は難しく行動力がないと良い写真が撮れないと思います。小本もどんどん変わるので、細々とでも続けて記録に残しておきたいと思います。





織笠 清さん

国内外からの支援に謝意を込めて、周囲に見てもらいたいところやこれからどう変わるかを記録に残して、世の中はどう進化するか次世代の人々に見てもらいたいと思います。ますます良くなることを望み、カメラを向けます。



加藤恒悦さん

全国の皆さま、岩泉町小本の復興にはお世話になっております。フォトグラファは今回初参加です。説明会と撮影会現場に参加しましたが、シャッターチャンスがつかめず、先生の指導のもとで何枚か撮影することができました。





金澤千鶴子さん

復興していく小本の写真を残したいと思っています。3年8カ月仮設住宅での生活ですが、今は土地が決まり来年春には家が建ち、先が見えてきたので気持的に安心することができました。今後は自分の家も撮っていきたいと思います。



熊谷貴里子

私は震災を目の当たりにしました。今も忘れる事はできませんし、一生忘れる事はないでしょう。気持ちが沈みかけていた中、「だれでもフォトグラファ」に出会いました。復興していく小本を目に見える記録として、これからも撮り続けていきたいと思います。





小成智子さん

きれいだなと思ったときにシャッターを押しています。同じ風景でも季節によって違いがあります。自分でこれはいいと思ったものがそもそもなかったり、何気なく撮ったものがよかったりします。小本の復興状況も残したいと思います。



佐々木悦子さん

突然の震災に見舞われ何をしたらよいのか分からずいた私たち。スタッフの方々のお陰で小本の風景をカメラに収め、見つめることができました。写真は私たちにいつまでも安らぎを与えてくれます。皆様に感謝とありがたいの気持ちを伝えたいです。



佐々木一幸さん

ふるさと
大震災で変わりゆく故郷を
写真にして残しておきたい
と思い参加しました。工事
現場や風景、暮らし等を撮
影する機会に出会えて本当
に良かったと思います。ス
タッフの皆様には感謝して
おります。ありがとうございます。



田中道雄さん

東日本大震災も3年8カ月が過ぎ去ろうとしています。私も東日本大震災がなければ「だれでもフォトグラファ」に参加していなかったはずです。今カメラは常に車に積んで、いつでもシャッターチャンスがあれば撮ろうと思います。





長崎基一さん

3.11 後を記録しておこうと思って写真を始めました。流された松林の中で1本だけ残った松や高くなった堤防の風景などを季節ごとに撮って、災害から命だけは守るよう、今後の教訓としてもらえるといいです。



箱石芙慈子さん

見慣れた風景もカメラごしに見ると新しい発見があり、日々変わっているのので、写真に残していくのも大切なことだと思います。実家に置いてあった卒業証書や文集などが流されてしまったので、これから残せるものを撮っていきたいと思います。





箱石昌彦さん

震災1年半後、小本に戻ってきました。当時はまだ集団移転地も構想段階で住宅再建については先の見えない状況でしたが、今はレンズの向こうに宅地造成が見えます。来年には新しい町が見えてくることでしょう。



三浦悦子さん

仮設住宅に入って閉じこもりがちだったので、娘に「外に出た方がいいよ」と背中を押されて始めました。天気の良い日に撮ろうと思っています。こども園ができて、小中学校の工事も進んでいるので撮りたいと思います。





三浦淳一さん

地元の人たちの写真で記録誌を作成していただいたことが嬉しい思い出にもなり、後世にも残り貴重な資料になることと思います。小本の季節ごとの風景、工事の途中経過など、今でなければ撮れないものを記録したいと思います。



三浦トシ子さん

物事を見つめる目がカメラ目線になってきています。美しい風景とかいい笑顔に出会った時、「あっカメラに収めなきゃ」と焦ります。シャッターチャンスを見逃さなければいい写真を残せることがたくさんあります。我が故郷は素晴らしいです。



三浦忍一郎さん

小さい頃から機械いじりや音響などが好きだったのでカメラにも興味をもっていました。今しか撮れないもの、復興の様子を撮っておきたいです。写真は満足と失敗の連続ですが、これからも撮り続け孫子に残していきたいです。



三浦浩子さん

フォトグラフィアに参加したのは“どこでもカフェ”の手伝いをするようになってから。この冊子を小本中学校の卒業生や先生方に見て欲しいです!! 皆に復興の様子を知らせたいから。将来、桜の名所になるように防潮堤に、桜の木を植えたいですね!!





三浦幸美さん

みんながきれいな風景を撮っているので、私もできるかなと思って参加しました。昔住んでいたところは見たくないの、撮っていません。きれいなところを写したり、お祭りや行事のときにみんなの笑顔を撮るのが楽しいです。



和野浩也さん

いろいろと撮影して歩いているため、どうしても枚数が増えてしまいます。だれでもフォトグラファに参加して目的をもって撮るようになりました。これからはイベントがあればカメラをもって参加し、岩泉を記録していきたいです。



2 岩泉・小本のいま―その3

「だれでもフォトグラフィア」の活動は、震災による被害から立ち上がり、復興していくふるさとの姿を記録しようと始まった。フォトグラフィアの参加者たちは、さまざまな角度から被災と復興を描こうと努め、シャッターを押ししている。

被災したまちの記録を続けるためには、震災時の体験や、その時に経験した緊張や恐ろしさなどの気持ちを振り返るといふ辛い作業に向き合う覚悟が必要だったと思われる。

しかし、参加者は、活動を続ける中で、仮設住宅に住む仲間や半壊の家を修理して住む隣人、遠方から支援に訪れる友人、子どもたちの笑顔にもたくさん出会うこととなった。こうした出合いの力が、参加者だけでなく、町民の復興に向かう気持ちを奮い立たせてくれることにつながったのではないだろうか。

また、参加者が撮影した写真からは、住民にとって、これまで当たり前前ものとして通り過ぎていたまちの風景が、言葉に言い表せないほど素晴らしく、美しいものとして見えてきたことがうかがえる。

フォトグラフィアが撮影した写真は、この記録集に収められた数々の復興事業の進捗とともに、復興に向かう岩泉町の姿を映し出している。



4人のいま 飯塚亜季



70
一緒に遊ぼう 三浦淳一



いつも一緒に 箱石芙慈子









小本川風景 加藤勝彦





収穫の喜びは家族で 三浦登紀子



日が昇る 鈴木孝徳



女神橋から望む 田中道雄



今日も仕掛ける 佐々木秀明







小本 龍泉洞
Kobon Ryūen-dō
この先100m

祭

祭



収穫はみんなで 織笠清



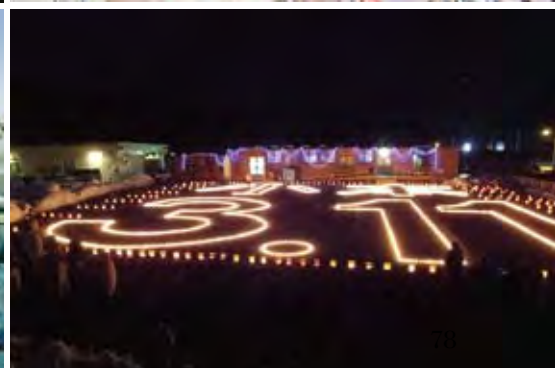
夕焼けのふるさと 小成智子



秋のまち 工藤栄吉



雪はすべてを美しくする 三浦忍一郎



3年がたった 熊谷貴里子



爪痕はまだ消えない 三浦トシ子



3 「復興」を撮るー撮影会

「だれでもフォトグラファ」では、4カ月に1回程度の頻度で合評会を開いている。会にはそれぞれが撮りためた写真を持ち寄り、プロカメラマンの橋本照嵩氏を中心として、互いに批評しながら腕を磨いたり、次の撮影目標を立てたりしている。他の人が撮った写真を見ることがや互いに批評し合うことは、フォトグラファ参加者にとつて大変役立つことだった。

経過とともに、参加者から「橋本カメラマンに、一緒に歩きながら撮影の指導をして欲しい」という希望も出てきた。要望を受けて主宰の UFA JAPON は、平成24年5月12日、25年12月8日、26年11月29日の3回、橋本照嵩氏とフォトグラファとの撮影会を実施した。初回は技術的なことを教わり、2回目と3回目はそれぞれ「お世話になった仮設住宅」「復興を撮る」というテーマを決めて撮影会を開催した。楽しく競い合いながら同じ題材のもとに写真を撮ることは素晴らしい体験だったようで、参加者は、改めてこの4年間を記録することの重大さ、この間に得た経験や知恵を明日の岩泉に生きる人たちに伝えていくことの大切さを実感した様子であった。





漁港の復興は進む 和野浩也



81
漁港の復興は進む 三浦幸美



2014. 9. 14
地盤沈下・海面上昇 佐々木一幸



被災と復興の境界 和野浩也



テトラポットが守る 加藤恒悦



ブイの証言 和野浩也



82
仮杵もできた 熊谷貴里子



この先は太平洋 阿部範子





水面も復興する 三浦トシ子





大きな船が沖合に 箱石昌彦





サッパ船も忘れないで 小成智子



漁獲物を集荷・加工・作業する場所 佐々木一幸



被災と復興の境界 織笠清



係留する 三浦幸美





出漁の用意は万端 熊谷貴里子





14 SEP 2014

漁港の復興は進む 織笠清





龍甲岩もみえる 箱石昌彦



岩泉町の人々は、大震災により未曾有の被害を受けたことに負けず、コミュニティとして存続する彼らのまちの記録として、「だれでもフォトグラフィ」と名付けた写真プロジェクトを立ち上げたのです。この復興への有益な取り組みに、救いの手を差し伸べて下さった世界中の皆様へ感謝申し上げます。震災当初は、被災地の現状に非常に多くの注目が集まり、たくさんの報道がなされましたが、そうした状況は長く続きませんでした。この写真展をヴァージニア工科大学が主催する重要な側面の一つには、震災から時を経ても、被災地に関心を持ち、気遣う人々が世界中に存在するという事を示すことにあります。IAWA は、この成果を展示できることを誇りに思います。

Donna Dunay

(ヴァージニア州立工科大学建築学科教授、
国際女性建築家アーカイブ運営委員長)



In a wonderful thought of friendship the people of Iwaizumi-town created the Daredemo Photographer - We are all photographers exhibition in conjunction with IJFA Japon to document the continuing existence of their town as a community in the days after the devastation by the great earthquake. Sent out as a thank you to those around the world who extended a helping hand demonstrates an important act of recovery. When disasters happen, there is a great deal of attention and coverage initially, and then it disappears. One of the important aspects of hosting this exhibition here at Virginia Tech is that it shows there are people who are still interested, years later, people still care. The IAWA was honored to showcase this effort.



Donna Dunay,

FAIA, G.T. Ward Professor of Architecture
Chair, International Archive of Women in
Architecture (IAWA)

2011年3月11日、日本の東北地方を押し流した恐ろしい津波の直後に、優れたプロジェクトが計画され、その成果として、岩泉町の人々が撮影した写真をカウギル・ホール (Cowgill) において展示致します。あの日、未曾有の被害を受けた岩泉町は、少しずつではあっても復興を続けています。津波の直後から建築家の皆様は、岩泉町の悲劇を記録に留めようと、あらゆる年代の住民にカメラを提供致しました。このユニークな試みにより、私たちはこの地域で暮らしてきた人々が、震災でほぼ全てを失ってしまった現実を肌で感じることができるのです。津波直後からのリアルタイムな経過、復興の過程は、災害の貴重な記録になるとともに、長く輝かしい未来を目指し懸命に取り組む岩泉町の人々の、不屈の精神を表したものと伺えます。現在、コミュニティの回復力といった概念が、大いに着目されています。また、生き生きと描写されたこれらの写真は、比類のない貴重な教訓であり、世界中の人々に恩恵をもたらすものです。日本国内以外では初となる写真展の開催地として、このヴァージニア工科大学をお選びいただいたことに、厚くお礼を申し上げます。

Charles Steger (ヴァージニア州立工科大学学長)



This unique approach enables us to share the experience of the disaster as it appeared to those who lived closest to it, and lost the most. The real-time history of the aftermath of the event and ongoing reconstruction is a priceless record not only of the disaster, but also of the indomitable spirit of those who are committed to a long and bright future for Iwaizumi Town. Today much attention is being given to the concept of community resiliency, and these images provide a unique and valuable lesson from which others around the world may benefit. We are deeply grateful to our guests for choosing Virginia Tech to be the first location outside of Japan for these photographs to be displayed.

Charles Steger

Dr., President, Virginia Polytechnic Institute and State University

ヴァージニア州立工科大学における写真展 (2013年5月) オープニング挨拶より抜粋



ブラックスバーグ町長として、また、市民の代表として、私たちは、岩泉町民の皆様と日本の皆様を歓迎し、私たちの友情を述べたいと思います。

「だれでもフォトグラファ」は、復興期の重要性と皆様の復興への力を記録することによって、町民の方々の復興への決意と精神を表しています。「この災害に苦しむ人々自身によって、なにが真実なのかを写し出す『写真』という手段で、本当の現況を世界に知らせる」ことは、私たちをあなた方の生活の一部に招き入れてくれることになるのです。はるか6000マイルかなたのまちから、あなた方と想いを共有し、あなた方のご健勝と生活再建、あなた方のまちの復興への貢献を祈ります。

Ron Rordam (ブラックスバーグ町長)

As Mayor of Town of Blacksburg, and on behalf of our citizens, we extend a warm welcome and heartfelt friendship to the citizens of Iwazumi-town and Japan.

The "Da-re-de-mo Photographer" exhibition demonstrates the commitment and spirit of your community to document the importance of this recovery time and the resilience of your citizens. "To report the true conditions to the world with photos taken by those who have suffered from this disaster, being true to their situation" invites us to be a part of your lives. We hope that sharing images of your town 6,000 miles away from ours brings comfort and strength in reconstructing your lives and contributes to the recovery of your town.

Sincerely,

Ron Rordam
Mayor

甚大かつ壊滅的な被害をもたらした災禍の後に、私は被災地を訪れる機会を得ました。地震とそれによって引き起こされた津波は、住民の方々に深い傷跡を残し、被災者の方々の心が癒されるためには、まだ長い時間を費やす必要があると思います。しかし、立ちだかる困難を乗り越えようとする勇氣と、現実を受けとめる力を目にして、以前と変わらぬ生を取り戻そうとする姿勢や決意を賞賛せずにはいられませんでした。その粘り強さと実行力は、私たちすべての人間に共通するものとして、記憶されなければならないと思います。

Solange D' Herbez de la Tour (国際女性建築家協会 会長)



Juste après le sinistre qui a frappé par son ampleur et son intensité le peuple japonais le 11 mars 2011, j'ai eu le privilège de me rendre personnellement sur les lieux.

Le tremblement de terre et le tsunami qui ont suivis ont laissé après leurs passages, des populations gravement atteintes.

Leurs blessures traumatisantes seront longues à se resoudre.

Néanmoins vu et connaissant leur courage et leur force d'acceptation à surmonter les difficultés, qui se dressent devant eux, nous devons qu'admirer leur courage et leur détermination à soigner leurs blessures et à reprendre la vie comme avant.

Leur ténacité et leur force de travail doivent rester comme un exemple pour nous tous.

Solange D'Herbez de la Tour
Président, Union Internationale des Femmes l'Architectes

「だれでもフォトグラファ」の皆様からの復興メッセージを多くの方々に提供する好機をいただけたことに心より感謝申し上げます。女性センター「ブーク21」は男女共同参画社会を推進する拠点施設で、1階にある交流コーナーは男女問わず幅広い年代の方が訪れます。そこでは学習や交流など自分を磨いたり、見つめ直したり、自分らしく生きることを考えたり、何かを変えようと踏み出そうとしている方が集います。そんな空間に、「だれでもフォトグラファ」の作品は、生きる力・感じる力・思いやる力・育つ力など人間の多くのエネルギーを与えてくれ、心を動かされ勇氣をいただきました。カメラを相棒に今日も新たな発見をしているのかと想像し、その心と着実な復興の便りが届くことがとても楽しみです。

飯野徳子 (東京都中央区女性センター「ブーク21」)



* 5人のメッセージは「だれでもフォトグラファ」の写真展を開催した各地から送られてきたものである。紙面の都合上、原文、訳文ともに要約している

5 「だれでもフォトグラファ」とともに

—写真家・橋本照高

◆写真が身近なものになった

4年間を振り返って最も感じることは、「格段に写真がよくなっている」ということだ。撮るものにも追いついて、力があり、撮りたいものを撮れるようになっていく。いつも車やポケットにカメラを持ち歩いて、写真が身近なものになっているということが表れている。

カメラを構える立ち位置も、体を前後、左右、上下と動かすうちに、体をぶつけて撮れるようになり、技術と気持ちが一体となってきている。

◆被災地を撮る

初めは驚きや嘆きでシャッターを押したと思われるが、年月がたつうちに自分たちの暮らしの中で驚きだけでは終わらない写真的「目」が養われてきている。

自身、故郷の「石巻」を撮っているが、私は被災地を撮らなかつたら後悔すると思った。だから撮ると決めた。子どもの頃泳いで育った北上川が心か

ら離れなかつた。被災地の人々がもつ亡くなった人への祈り、これからの生活への祈りを感じている。

◆「だれフォト」の素晴らしさは継続性にある

被災地の写真撮影はたくさんあるが、「だれフォト」の素晴らしさは継続性にある。継続する中で自分たちの日常を認識でき記録していく意味を認めることができる。合評会で発表できることも刺激になっている。互いの写真を見て認め合えることは大きい。小本駅構内や国内外での展示などいろいろなところで発表の場を持ち、今を伝え、継続して知ってもらうことも大切だ。



「見慣れた風景」「家族」「暮らし」など、身近なものを撮ることで自分たちの暮らしを実感できる。いいと感じたら必ずシャッターを押し、これからも日常の実感を撮り続けて欲しい。

第5章

復興の進捗

工事車両が行き交い

堤防が海や川を遮り 腰廻山は削られて

コンクリートのトンネル橋脚が現れ

景色は大きく変わってきた

昔に戻ることはもうしない

小本駅を中心として

新しいまちづくりに挑む私たち

復興とは何かを

問い続けながら



1 東日本大震災・復興の中の岩泉

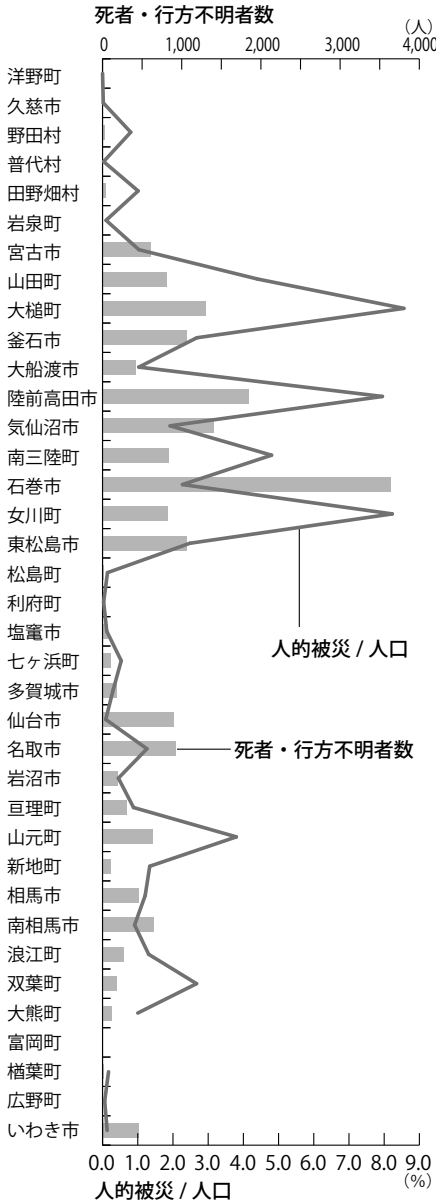
東日本大震災と岩泉町

平成23年3月11日午後2時46分、宮城県沖を震源としてマグニチュード9.0という、日本周辺では観測史上にかつてない規模の地震が起きた。最大震度7の揺れが数分間にわたった後に襲った津波は869年の貞観地震以来という大きさだった。震災関連死を含めると2万人を超えるといわれる人的

被害の9割、全半壊など合わせて46万棟近くに上る建物被害の多くはこの津波によりもたらされた。

内閣府では経済的被害額を16～25兆円と試算している。これは平成23年度の岩手県、宮城県、福島県の県内総生産額の合計18兆円にほぼ匹敵し、世界銀行も自然災害による経済的損失額としては史上1位と推計している。さらに津波は原子力発電所のメルトダウン事故を呼び、この未曾有の災害に対して、「国を挙げて対処するため」震災の翌年に復興庁が創設され、一元化を図った効率的な復興が目指された。

図1 人的被害状況



資料：各自治体ホームページより UIFA JAPON 作成

被災状況は地形などで異なり、岩手県南部から宮城県北部の被害が大きい(図1参照)、被害の大きかった東北3県(岩手県、宮城県、福島県)の太平洋沿岸を見ると、被災した市町村の規模は小さな村から人口百万を越す政令市まで多様で、首長を始めたとする職員が被災しているなど、復興の取組みに大きな困難もあった。

岩泉町は死者13人(関連死含む)、家屋208棟の被害を受けた。地盤が強い内陸部に直接被害はほとんどなく、海に面した小本地区での津波被害が大きかった。小本は町の人口のうち17%弱を占める地区で、全町体制で小本の復興に集中する形がとれたため、この被災を機とした人口流出はあまり起きなかった。

復興計画づくりの経緯

復興計画の作成は、国レベルで平成23年4月に有識者による復興構想会議が設置された。その議論は12回に及んで6月に提言が発表され、「いのち優先、減災、二線堤」などの基本的な考え方が示された。

6月からは自治体ごとに国交省直轄調査が始まり、8月に1次報告、10月に2次報告、12月に3次報告が出て、各自治体は前後して調査に基づく復興計画を議会承認している。

町は震災直後に対策本部を設置した後、4月に震災復興対策本部を設置し、被災者と意見交換、アンケートを重ねて6月に学識経験者、関係行政機関、地域代表者から成る復興委員会を開催、その後、地域懇談会、広報紙による移転候補地の周知、アンケート、中学生議会などを経て、震災復興計画が9月に議決された。

計画は、一日も早い生活再建、防災体制の強化、産業経済の再生を三本柱とし、さらに新たな地方の価値を創造して町全体の発展につなげることであった。生活再建は住宅の確保、社会生活基盤の再生、保健・医療・福祉の充実、教育・文化の振興、地域コミュニティの再生を目指すとし、防災体制の強化としては防潮堤など防災設備の復旧強化と併せ、災害時の情報伝達システムや避難・支援体制の再構築、新エネルギー対策などの災害に強いまちづくりを、

産業経済の再生は地場産業の再生・復興と共に、雇用の創出を目指している。計画期間は平成24年度までの復旧期、26年度までは再生期、31年度までを発展期と定めた。

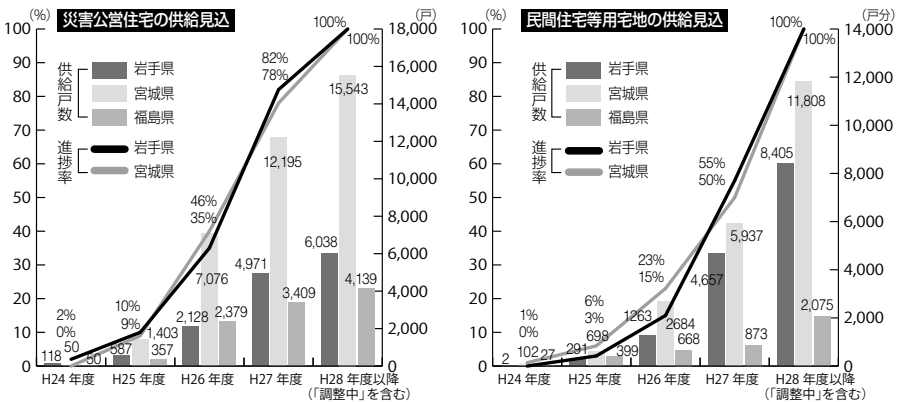
復興の指標で見る現況

復興の現況を見るのに指標とできるのは、事業計画の内容やその達成度という数値、言葉に表現できるものとなる。具体的には住宅整備、防災対策、産業復興、人口動向などを指標とすることが考えられるので、それぞれについて、復興庁のホームページを参照しながら町の現況を確認する。

① 住宅整備はまずまず順調

震災後ほどの被災地でもまず仮設住宅建設が急がれた。従来のプレハブ仮設に加えて、木造の仮設住宅も登場して、これまでの経験を活かした質の向上への努力が認められる方向があり、借家のみなし仮設も可能になった。しかし本格住宅を整備してこそ復興であり、復興計画では東北3県だけで5万戸を

図2 災害公営住宅、民間住宅等用地の供給見込時期・累計（平成25年12月末時点）



※福島県における原発避難者向け災害公営住宅の整備戸数は、整備中の1,455戸（上記戸数に含まれる）を含み、全体で4,890戸を予定しており、うち3,700戸は平成27年度までの入居を、1,190戸は平成27年度以降早期の入居を目指している（平成25年12月末時点）。
 ※平成24年度の供給戸数は実績値。平成25年度以降の供給数は見込。
 ※「調整中」は、用地交渉中や整備計画の策定中など現段階では供給時期が確定していないもの。
 ※「供給見込時期」は、災害公営住宅の場合は建物の引き渡し見込時期、民間住宅等用地の場合は宅地造成工事の完成見込時期。
 ※「民間住宅等用地」は、地方公共団体が土地区画整理事業、防災集団移転促進事業及び漁業集落防災機能強化事業により供給する住宅用地数を計上。
 ※上記の数値は平成25年12月末現在で各県が市町村から提出を受けたデータをもとに集計・整理したもの。
 最新版は復興庁ホームページに掲載（<http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-12/20130730105832.html>）

資料：「復興の現状」復興庁（平成26年5月30日）

超える住宅整備が見込まれている。3年を過ぎ（26年3月末）現在、実現は1割に満たない状況で、復興のスピードは遅く、被災者の苛立ちの大きな原因となっている（図2参照）。平成25年度の国の復興予算の35%が未執行となったのは、需要増大による人件費、建設費の高騰による入札不調による影響もある。

26年6月時点で、災害公営住宅は福島県分を除いて完了が11%、防災集団移転による土地造成は工事了完了22%、土地区画整理は宅地引渡開始地区8%、漁業集落防災強化は工事了完了30%という現況になっている。

町では後に個別の事業で見えるように、がれきの撤去に始まり、仮設住宅の建設入居が23年5月、用地取得から設計作業、工事業者の選定、発注などを経て25年に災害公営住宅森の越団地が完成・入居、26年には小本団地も完成・入居している。集団移転地は造成中で27年3月の引き渡し予定であり、被災地全体の中ではまず順調といえる方である。

② 防災対策はまちづくり

防潮堤や土地のかさ上げなど、再び襲う可能性のある大災害に備えるには、復興構想会議が示したように、避難計画も含めた「減災」の考え方にたつて、二線堤としてのかさ上げ道路など、まちづくりとして検討する必要がある。防潮堤の高さなどで住民合意が得られにくい自治体もあったが、ハード系の公共インフラはおおむね順調に復興が進み、住宅整備の遅れに比べられることが多い。海岸対策、海岸防除林対策は70%前後、河川対策、水道施設、下水道、災害廃棄物処理などは90%前後、交通網は道路、鉄道、港湾とも100%に近く回復途上にある。

町では小本の防潮堤や河川堤防を強化することで、従来の土地に住む選択肢も可能としたが、安全性を重視していた小中学校や子ども園をはじめとした中心市街地を三陸鉄道小本駅周辺に集約する方向で整備を進めている。徒歩で回遊できるコンパクトシティは環境にもやさしいという考えに基づいている。

小本駅舎と一体になった複合拠点ビルは、津波防災避難施設として整備され、役場支所、診療所も含

むなど中心的機能を有し、27年度の完成を目指して
 工事中である。

③ 産業復興はまだら模様

産業別に見ると、農業は農地7割で除塩などによつて営農再開見込みであり、これからの農業を見据えた面的な集積による経営規模拡大や、土地利用の整序化を図る農地の大区画化なども進んでいる。

水産業は漁港の回復が91%、水揚げ7割、水産加工施設は79%だが、震災により失われた販路確保の問題などがあるため、水産加工業者の売り上げ回復が遅れている。

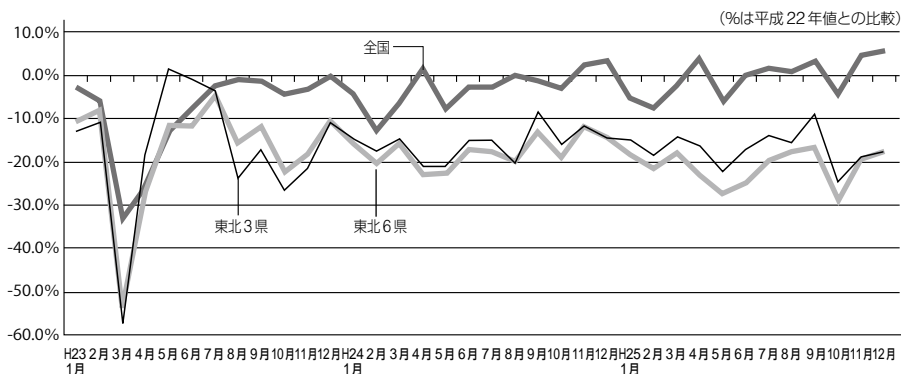
観光業は、観光客の宿泊者数に改善が見られるが、全国では増加傾向が見られるのに対し、東北の足取りは弱く、本格的な復興が今後の課題となっている(図3参照)。

町の漁業は小本浜漁業協同組合が定置網を再開するのも比較的早かった。漁船の手当も終えたが、高齢化もあって、この機に漁業をやめる人も出た。農業では農地の除塩を終え、主となる酪農への影響は

図3 産業の復旧・復興の状況〔観光業〕

■観光客中心の宿泊施設の延べ宿泊者数(同月比の推移)

観光客中心の宿泊施設は、平成25年においても平成22年値との比較において、全国・東北6県・東北3県いずれもマイナスとなっている。



※〔観光客中心の宿泊施設〕とは、宿泊者のうち観光目的の宿泊者が全体の50%以上と回答した施設。

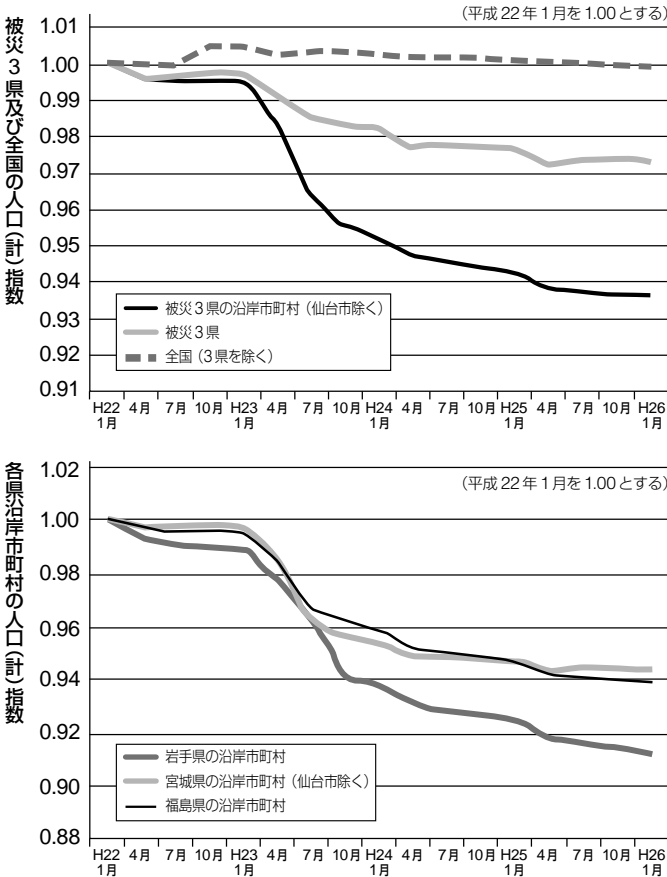
資料：「復興の現状」復興庁(平成26年5月30日)

④ 人口動向に表れる復興の進捗
被災を契機に他地域での居住を選択してしまう場合も多く、人口の増減に示されるように、人口減少社会の現実の様相を呈すことになった。東北3県の人口減少は大きく、さらに沿岸自治体の減少率が大きい。東北3県のうち、特

少なかったが、漁業と同様の高齢化の課題がある。新規の工場誘致も2社あったが、観光業では団体客の減少があり、産業全体としての回復は、震災前までに至っていない。

図4 人口推移（被災3県の沿岸市町村）

沿岸市町村の人口推移は、減少傾向にあるものの、平成24年4月以降、減少の度合いが鈍化している。



資料：「復興の現状」復興庁（平成26年5月30日）

に岩手県の減少が目立っている（図4参照）。また被災した家の再建にあたって、安全性を重視する高台移転は職住分離を進める結果を生み、これまでの三世代同居からの世帯分離が増えるなど、ラ

イフスタイルの変化が見られた。

町では住宅再建がおおむね順調に推移しており、震災を機にした人口減少はそれほど見られない。減少率は被災3県全体の数値とほぼ同じで、沿岸自治体の落ち込みには至らない。長期的な減少傾向を一気に反転させることは難しいが、復興事業をてこに、産業振興による生業の場を確保し、進む高齢化に対して若者の流出を少しでも止めていきたいと考えている。工場誘致や従来からの農業、漁業への新規流入も視野に入れ、国際的に増大する観光需要にも対応していきたい。

復興の応援―自治体間交流

復興事業の施行に当たっては、通常予算の数倍をこなさねばならないことも多く、他市町村から派遣される応援職員の支援が必要とされた。

被災自治体の職員事務軽減のための支援は、全国の自治体から職員が派遣されているのが2千人強、被災自治体による任期付職員が千4百人余、全国の市町村職員OBの活用システムの採用、民間企業等

の人材の活用、復興庁による市町村業務支援、URの復興支援などの体制がとられている。

町の被災程度は他の被災自治体と比べてそれほど大きくなかったとはいえ、これまでにはない業務も増え、友好都市である東京都昭島市や、高知県高知市などから応援職員の派遣を受けてきた。高知市は東南海トラフ地震が想定されることもあって、若手技術職員を半年交替で派遣している。地方公務員にとって、他自治体で仕事するのは得難い体験であり、相互にとって貴重な交流の機会となっている。

2 復興の進捗

町では震災復興計画に基づき各事業を行っている。ここでは、主要な事業（国、県事業を含む）について東日本大震災から3年余を経ての状況を事業ごとに示す。

1 災害廃棄物(がれき・津波堆積物)処理

①事業内容

東日本大震災の災害廃棄物の処理にあたり、小本仮置場までの搬入については岩泉町で行ない、その後の処理は岩手県に委託した。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費	20億9,094万円
国庫補助金	18億4,821万円
県補助金	5,109万円
特別交付税	1億9,163万円

④スケジュール

平成25年10月までに災害廃棄物を小本仮置場に搬入、分別処理後に宮古市藤原埠頭(一次保管施設)に搬出完了。

平成26年3月までに仮置場の土質調査後、埋め戻しを完了した。

⑤事業概要

小本仮置場(岩泉町小本字須賀18番地ほか)で次の事業を実施

災害廃棄物処理：処理量		64,982t
内訳	がれき	30,834t
	津波堆積物	34,148t



平成24年9月撮影【着工前】



平成26年4月撮影【完成】

2 小本地区復興排水施設

①事業内容

地盤沈下に対応するため集落内の冠水を防ぐことを目的に排水施設の強化を行う。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 5億3,800万円（用地取得、設計、工事）

復興交付金

④スケジュール

平成26年4月着工、27年9月完了（予定）

⑤事業概要

岩泉町小本字小本で次の工事を実施

調整池2カ所、側溝工、カルバート工、道路工の施工



平成23年3月撮影



平成26年12月撮影

3 小本海岸須賀地区海岸災害復旧事業

①事業内容

東日本大震災津波により被災した小本海岸防潮堤の復旧を行うものである。

津波が防潮堤を超えたため、陸側被覆工の基礎部周辺が洗掘され、基礎工及び被覆工（枠張工）が被災したことから、基礎工及び被覆工を復旧するとともに、基礎工下部に矢板を設置して洗掘に耐えられる構造とし、再度災害の防止を図る。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

総事業費（工事費）9,658.5万円

公共土木施設災害復旧事業費国庫負担金（負担率 97.2%）

④スケジュール

災害査定：平成 23 年 10 月下旬

工 期：平成 24 年 3 月 31 日～平成 25 年 3 月 20 日

⑤事業概要

岩泉町小本字須賀 57 番地 7～60 番地 2 で次の工事を実施

復旧延長 332.8m、矢板工 906 枚、枠張工 1,185㎡、排水構造物工 1 式



被災状況 1
(平成 23 年 3 月撮影)



工事中
(平成 24 年 9 月撮影)



被災状況 2
(平成 23 年 3 月撮影)



完成後（平成 25 年 8 月撮影）

4 小本漁港海岸

①事業内容

津波による被害で崩壊した海岸堤防について災害復旧工事を実施する。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 1億 1,300万円(工事費)

漁港施設災害復旧事業国庫負担金

④スケジュール

平成 23 年 5 月着工、25 年 3 月完了

⑤事業概要

岩泉町小本字小本で次の工事を実施

小本漁港海岸防潮堤 271m の復旧



平成 23 年 3 月撮影



平成 24 年 6 月撮影



平成 26 年 12 月撮影

5 小本川—三陸高潮対策事業

①事業の内容

東日本大震災津波により甚大な被害を受けた岩泉町小本地区において、既設海岸防潮堤の背後に新たに山付堤防を整備するとともに河川堤防をかさ上げし、津波から居住地を防護する工事を行う。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

総事業費 12億6,000万円

社会資本整備総合交付金（復興枠）

④スケジュール

平成25年6月工事請負契約締結、27年度中完成（予定）

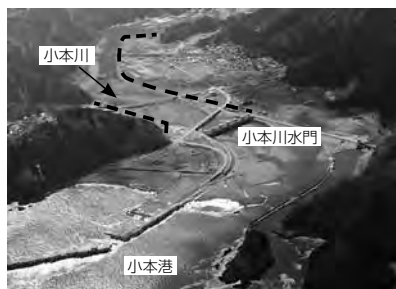
⑤事業概要

岩泉町小本で次の整備を実施

山付堤防 L=121m 整備高 T.P.+14.7m の整備

小本川右岸堤防 L=398m のかさ上げ

小本川左岸堤防 L=1,812m のかさ上げ



【着工前】



【施工中】

6 茂師漁港——海岸保全施設災害復旧事業

①事業内容

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震による大津波では、茂師漁港海岸の海岸保全施設及びその後背地の民家や漁協施設が甚大かつ深刻な被害を被った。この震災を受けて岩手県では、比較的発生頻度の高い津波を対象とした堤防等海岸保全施設の整備、並びに発生頻度は低いが堤防を越えるような大津波に対して粘り強くその機能を有する構造物の整備を復旧の方針として示した。この方針に基づき地震や津波などの天災から地域の人命及び財産を守るため、被災した堤防や水門等海岸保全施設の復旧を図る。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

災害復旧事業費 5 億 4,600 万円

公共土木施設災害事業費国庫負担金 (負担率 97.2%)

④スケジュール

平成 25 年 7 月本工事着工、28 年 3 月完了 (予定)

⑤事業概要

岩泉町小本字茂師地先で次の工事を実施

堤防：傾斜堤 天端高 TP+16.0m 延長 L=65m 盛土量 9,800^m

乗越し道路：延長 L=263.5m 道路幅員 B=5.0m

樋門：ボックスカルバート 外径 W11.50m × 5.30m (内空 W5.00m × 4.00m × 2 門)

水門：バランスウエイト式フラップゲート W5.00m × H2.60m 2 門



【震災前】



樋門据付【工事進行中】



施工全景【工事進行中】

【震災後 着工前】

7 茂師漁港—漁港施設災害復旧事業

①事業内容

平成23年3月11日の東日本大震災により発生した地震・津波により、防波堤の倒壊や消波工の飛散や流失、岸壁・護岸、道路の破損、地盤沈下による施設の機能低下等、壊滅的な被害により漁業活動ができない状況であった。よって、これら漁港施設を被災前の状態に復旧（機能の回復）するため、災害復旧工事を行う。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

災害復旧事業費 33億円

公共土木施設災害事業費国庫負担金（負担率97.2%）

④スケジュール

平成23年度着工、27年度完了（予定）

26年11月現在 進捗率75.0%

26年度までは港内の瓦礫撤去や防波堤、岸壁・物揚場、護岸、船揚場等の主要な施設の復旧を終え平成27年度は、道路や用地の舗装整備を行い完了する予定。

⑤事業概要

岩泉町小本字茂師地先で次の工事を実施

防波堤 L=493m、突堤 L=97m、護岸 L=377m、岸壁 L=167m、

物揚場 L=113m、船揚場 L=80m、臨港道路 L=409m、泊地 A=58,208㎡



沖防波堤 【被災直後】



消波工据付状況 【施工中】



【完成】



平成23年4月撮影 全景 【被災直後】



平成26年12月撮影 全景

8 小本漁港

①事業内容

津波被害のあった漁港の船揚場、物揚場、導流堤、防波堤などの復旧工事及び沈下した小本漁港のかさ上げ工事を行う。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 14 億 2,400 万円 (工事費)

漁港施設災害復旧事業国庫負担金

④スケジュール

平成 23 年 4 月着工、27 年 3 月完了 (予定)

⑤事業概要

岩泉町小本字小本で次の工事を実施

小本漁港の船揚場、物揚場、導流堤、道路、橋梁などの復旧



平成 23 年 3 月撮影



平成 26 年 10 月撮影

9 小本港

①事業内容

東日本太平洋沖地震に伴う津波によって、小本港では防波堤が倒壊するなど、以下のような被害が発生した。

防波堤2（ケーソン倒壊、破損）、物揚場（地盤沈下、上部工及び直立消波工倒壊）、岸壁取付護岸（上部工及び方塊ブロック倒壊）、防波堤3（パラペット一部倒壊、消波ブロック流失）、臨港道路（路面損傷、法面崩落、側溝破損）。また、その他の施設についても、地盤沈下に伴い港湾施設として必要な所定の高さを満たさない状態になるなど、ほぼ全ての施設について被害が及び、被災額は約15億円である。復旧事業の内容は、震災前の港湾施設に戻すものである。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

総事業費 14億4,700万円

港湾災害復旧事業

④スケジュール

平成24年5月着工、27年9月完了（予定）

⑤事業概要

岩泉町小本字須賀で次の事業を実施

小本港の防波堤、物揚場、岸壁取付護岸、臨港道路などの復旧



平成23年6月撮影 小本港【被災後】



平成26年11月撮影 小本港【復旧工事後】

10 避難路

①事業内容

漁港付近で作業中の漁業者が素早く安全な高台に避難できるよう避難路を整備する。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 6億2,000万円（用地取得、設計、工事）

復興交付金

④スケジュール

平成24年12月着工、27年3月完了（予定）

⑤事業概要

岩泉町小本字下中野で次の事業を実施

旧小本中学校付近から小本川水門まで避難路408mの築造

高さ約8メートル、道路幅5.0メートル



平成25年1月撮影



平成25年12月撮影

11 三陸沿岸道路（復興道路）

①事業内容

三陸沿岸道路「田老岩泉道路（田老～岩泉）」は、宮古市田老から岩泉町小本を結ぶ約6kmの自動車専用道路である。

現道の線形不良区間、津波浸水区間を回避し、走行性が向上するとともに、所要時間の短縮により救援物資の輸送拠点となる久慈港と宮古市間のアクセス性向上、救急医療施設への速達性向上等の効果が期待される。

②事業主体

国（国土交通省）

③財源と予算

総事業費 470億円（田老岩泉道路）

④スケジュール

平成23年度（第3次補正予算）事業化、平成25年3月着工、平成29年度開通目途（三陸沿岸道路のうち田老岩泉道路 L=6km区間）

⑤事業概要

岩泉町小本字小成～中島字長内地内で次の工事等を実施（写真は中島字長内付近）

道路建設に伴う用地買収（町担当）、改良工事、トンネル工事、橋梁工事ほかの施工



平成23年12月撮影
R455側から小本川方面【着手前】



平成25年6月撮影
【工事中-施工ヤード造成中】



平成27年1月撮影 【工事中-函渠工完成】

12 県道久慈岩泉線（復興支援道路）

①事業内容

内陸部から久慈市と岩泉町にアクセスする国道間を南北に連絡する復興支援道路、久慈岩泉線の2カ所（①龍泉洞、②大月峠）で交通隘路を解消する。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

①龍泉洞：総事業費 2億1,100万円、地方特定道路整備事業

②大月峠：総事業費 12億円、社会資本整備総合交付金（復興枠）

④スケジュール

①龍泉洞：平成24年8月供用開始

②大月峠：平成24年度詳細設計、25年度工事着手、28年度完成（予定）

⑤事業概要

岩泉町安家字半城子～岩泉字志田で次の工事を実施

①龍泉洞：L=1,100mの延長施工 ②大月峠：L=2,100mの延長施工



龍泉洞【施工前】



大月峠【施工中】



龍泉洞【施工後】



大月峠【施工後 - 一部区間】

13 国道 340 号押角峠地域連携道路整備事業

①事業内容

国道 340 号宮古・岩泉間の押角峠は、幅員狭小の 1 車線区間で線形不良や急勾配が連続する交通の難所となっている。これらを解消するため、道路整備を行う。

②事業主体

岩手県

③財源と予算

総事業費 約 65 億円

④スケジュール

平成 26 年着工、34 年完了(予定)

⑤事業概要

宮古市和井内～岩泉町大川で次の整備を実施

計画延長 3,300m、計画幅員 6.0 (9.0) m、トンネル延長 2,970m の整備



平成 23 年 1 月撮影
冬期除雪状況（幅員狭小・倒木）



平成 25 年 10 月撮影
急勾配・急カーブ



平成 25 年 9 月撮影
JR 岩泉線押角トンネル



国道 340 号線押角峠現道区間の課題整理

14 災害公営住宅（森の越）

①事業内容

入居者の生活利便性と近隣に病院などをはじめとする施設がある町の中心部に災害公営住宅を建設する。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 3億5,100万円（用地取得、設計、工事）

復興交付金

④スケジュール

平成24年8月着工、25年5月完成、25年5月入居開始

⑤事業概要

岩泉町岩泉森の越3番地1で次の建設を実施

木造2階建て2棟9戸、木造平屋建て1棟6戸の建設



平成25年1月撮影



平成25年2月撮影



平成25年5月撮影

15 災害公営住宅（小本駅周辺）

①事業内容

入居者の生活利便性とコミュニティ形成に配慮し、三陸鉄道小本駅西側隣接地に災害公営住宅を建設する。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 7億400万円（用地取得、設計、工事）

復興交付金

④スケジュール

平成25年2月着工、26年3月完成、26年4月入居開始

⑤事業概要

岩泉町小本字南中野で次の建設を実施

小本駅周辺にRC造2階建て1棟16戸、
木造2階建て4棟20戸の建設



平成25年12月撮影



平成25年3月撮影



平成26年3月撮影

16 漁業集落防災機能強化事業——集落再編(集団移転)

①事業内容

集落の安全対策のための集落再編(集団移転)を実施する。宅地、集落道及び上水道の基盤整備を行う。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 3億3,040万円(用地取得、設計、工事)

復興交付金

④スケジュール

平成25年7月着工、27年3月完了(予定)

⑤事業概要

岩泉町小本字南中野で次の造成を実施

集団移転地(西団地47区画、東団地12区画)の造成



平成24年4月撮影



平成26年9月撮影

17 おもとこども園（放課後児童クラブ）

①事業の内容

これまでの保育園としての機能に加え、幼稚園機能を併せ持った認定こども園として整備する。また、併設して放課後児童クラブを設置する。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 2億3,100万円

復興交付金 災害復旧費補助金

④スケジュール

平成26年4月着工、平成27年3月完成

⑤事業概要

岩泉町中島字長内211番地ほかで次の建設を実施

木造平屋建て（延床面積 599.33㎡）園舎の建設

（内訳 こども園 499.55㎡、児童クラブ 99.78㎡）



平成26年12月撮影

18 小本小学校、19 小本中学校

①事業内容

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で被災した学校施設を移転復旧するもので、小本小学校と小本中学校は、同一敷地に建設する。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 31 億 4,600 万円

国庫負担(補助)金、復興交付金及び町費

④スケジュール

平成 26 年 5 月着工、28 年 2 月完成(予定)

⑤事業概要

岩泉町中島字長内及び小本字南中野地内で小本小学校、小本中学校の校舎建設工事を実施

【校舎】 鉄筋コンクリート造4階建て 延床面積 4,600㎡
小学校と中学校は同一校舎(1、2階が小学校 3、4階が中学校)

【小学校屋内運動場】 鉄骨造 延床面積 920㎡

【中学校屋内運動場】 鉄骨造 延床面積 1,428㎡

【上屋付きプール】 鉄骨造 施設面積 803㎡

【屋外運動場】 運動場面積 17,825㎡



完成イメージ図



平成 26 年 12 月撮影 小中学校【工事中】



平成 26 年 12 月撮影 左：こども園、右：学校【工事中】

20 小本津波防災避難施設(複合施設)整備事業

①事業内容

事業は岩泉町震災復興計画に基づいて、被災地域の防災機能の向上と早期復興などを図るため、災害時の活動拠点となる施設を整備するものである。

施設はコミュニティ機能を有する一方で、有事の際には地区住民の避難施設となり、防災拠点に相応しい構造にしている。

また、建物には岩泉町役場小本支所、町立診療所を併設するほか、観光や三陸鉄道小本駅の一部機能なども有することになる。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総工事費[※]は 13 億 8,420 万円

復興交付金・震災復興特別交付税のほか、県補助金など

※「総工事費」は、建築、電気・機械設備の各工事費の総額

④スケジュール

平成 26 年 3 月着工、27 年 9 月建物完成(予定)、12 月完全オープン(予定)

⑤事業概要

岩泉町小本字南中野 241 番地で次の建設等を実施

鉄骨鉄筋コンクリート造、3 階建て 延べ床面積、約 2100㎡

車で避難する人のための避難滞留広場(駐車場)の整備



平成 25 年 12 月撮影
解体前の観光センター



平成 26 年 11 月撮影【工事中】



平成 26 年 4 月撮影 仮駅舎



複合施設の完成予想図

21 被災者の健康保持（健康相談、健康教室）

①事業内容

町民の健康維持のため、健康相談、健康教室などを行う。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

総事業費 614 万円

被災者健康づくりサポート事業費補助金 506 万円

高齢者の新たな生きがい創造事業 108 万円

④スケジュール

平成 24 年から実施

小本地区の各会場で月 2～5 回程度の教室の実施、訪問にて健康支援の実施

⑤事業概要

右の事業を実施

事業名	会場	開催回数
介護予防教室	2 力所	月 1 回
いきがいくらぶ	4 力所	月 3～4 回
リフレッシュ活動	-	年 6 回
健康見守り訪問支援等	-	随時



農作物について情報交換する参加者



いきいき菜園で枝豆の収穫



みんなでイスに座って体操

ノルディックウォーキングの講習会



22 地域情報通信基盤整備事業 —— 通称「ぴーちゃんねっと」事業

①事業内容

役場など公共施設と各世帯を光ファイバーでつなぎ、情報を告知端末で知らせる。防災情報の拡充化、安心・安全なまちづくり、地域活性化を目指す。

なお通称の「ぴーちゃんねっと」とは事業キャラクターの「あいぴーちゃん」から名付けたもの。

②事業主体

岩泉町

③財源と予算

全体事業費 28億6,000万円

平成24年度情報通信技術活用事業費補助金

平成24年度情報通信利用環境整備推進交付金

平成25年度情報通信利用環境整備推進交付金

④スケジュール

平成25年2月着工、27年1月完成

⑤事業概要

町内全域にわたり次の事業を実施

光ファイバー 353,748m (幹線)、646,150m (引込線)の施工、4,355世帯へ告知端末の設置



ぴーちゃんねっとキャラクターの「あいぴーちゃん」



平成25年9月撮影
【光ファイバーケーブルの架設工事】



平成25年6月撮影
住民を対象にした
ぴーちゃんねっと説明会



ぴーちゃん
ねっとで使用する告知端末



3 発展につながる復興

町の復興事業はおおむね順調に推移しており、復興計画における再生期までの進捗を見ている。町は昭和31・32年の町村合併で1町5カ村が合併してから60年近くを経たが、この間、人口は半分以下に減少しており、今回の震災で広く言われるようになった人口減少の先駆けの経験をしてきた。集落構成に大きな変化はなく、旧岩泉町の中心部における市街地活性化事業も試みられたが、町内の人口移動はあまりない。人口減少の多くは若者と産業の流出によるもので、今後の町の発展は、働く場の確保が不可欠である。

震災を機とした復興の目玉ともいえるプロジェクトは、交通の要衝としての小本市街地整備である。26年4月1日、JR岩泉線が廃止となり、三陸鉄道北リアス線の小本駅が町内唯一の鉄道駅になった。駅舎と一体に整備される防災拠点ビルが建設途上にあり、全線開通が決まっている三陸沿岸道路のイン

ターチェンジも駅周辺にできるので、小本中心市街地形成のため、新たに建設する公共施設や住宅を集約していく計画である。このプロジェクトを中心に、さらに町全体が活性化することが期待されている。交通の便に併せ、現代ではテレワーク（在宅勤務）を可能にし、事務所立地を都市部に限定しないブロードバンド基盤は、農業や漁業などの6次産業化にも若者の起業にも不可欠なインフラであり、防災対策を併せたびーちゃんねつと事業の光ファイバー敷設による今後の利活用が期待されている。

復興スケジュール

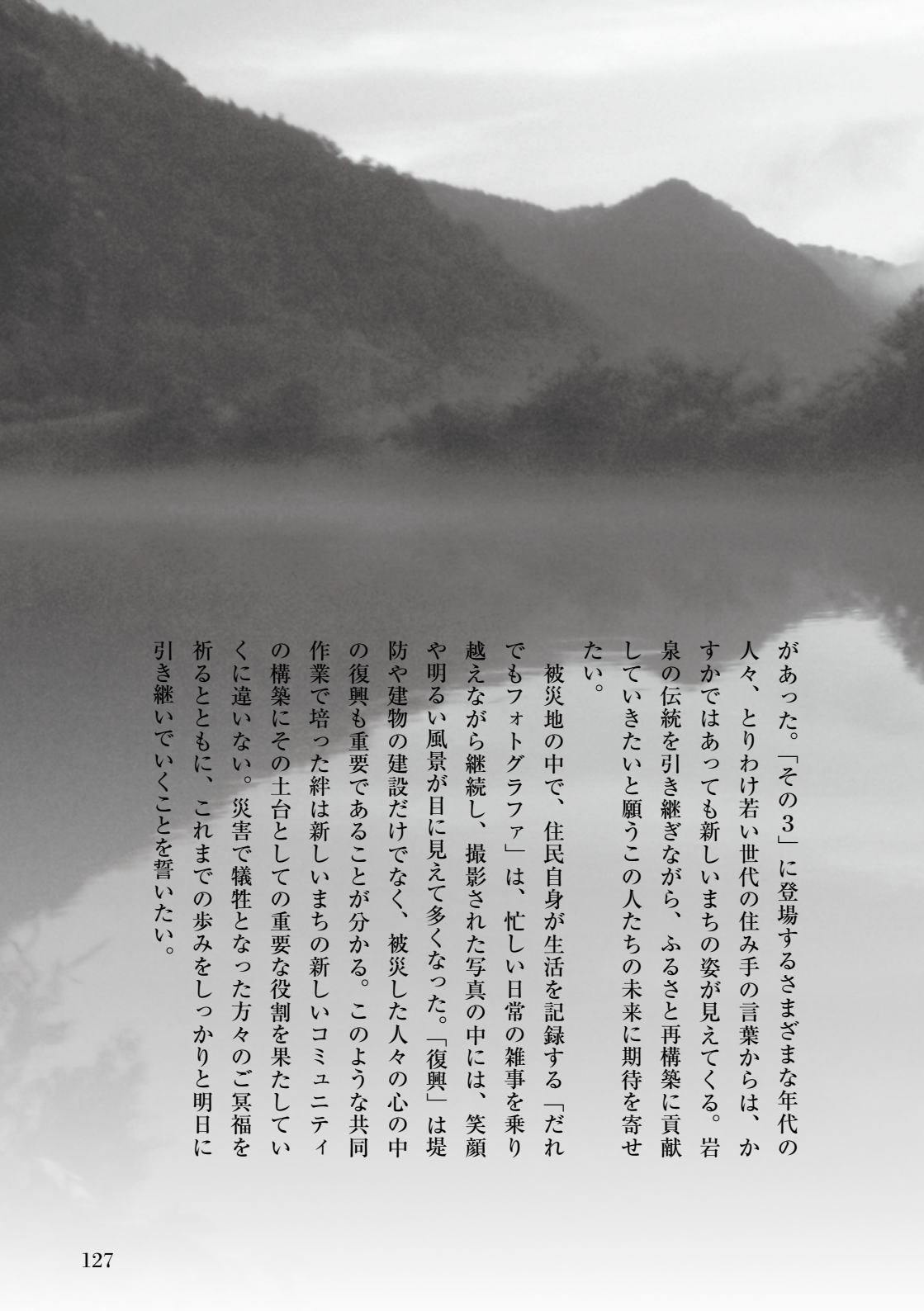
分野区分	細分項目等	事業主体	路線・箇所名等	事業概要	年度別整備スケジュール							
					第1期 (基盤復興期間)			第2期 (本格復興期間)			第3期 (更なる展開 への連結期間)	
					H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
海岸保全施設	一般海岸	県	1 小本川	(三陸高潮) 防潮堤 L=0.2km	用地、設計等			★工事				
			2 小本海岸	(災害復旧) 防潮堤 L=0.3km	■H25.3完成							
	漁港海岸	町	3 茂師漁港海岸	(災害復旧) 防潮堤 L=0.1km 水門 N=1基 他	用地、設計等			★工事				
			4 小本漁港海岸	(災害復旧) 防潮堤 L=0.2km 水門 N=1基 他	■H25.3完成							
復興道路等	復興道路	国	A 三陸沿岸道路	田老岩泉道路 (田老北～岩泉)	◆H25.3.27 起工式 ★測量、設計、用地買取を行い、順次工事に着手							
	復興支援道路	県	B(主)久慈岩泉線	龍泉洞	■H24.8.28 供用開始							
				大月峠	★測量、設計、用地買取を行い、順次工事に着手							
C(国) 340号	押角峠	*宮古市の復興支援道路・国道340号押角峠と同一箇所 測量、設計、用地買取を行い、順次工事に着手										
復興まちづくり	漁業集落防災機能強化	町	a 小本地区	対象戸数: 59戸 (民 59戸)	用地・造成			[民 59戸] 工事				
災害公営住宅	直接建設	町	ア 森の越 (単独)	木造 戸数: 15戸	[15戸] ■H25.5完成							
			イ 小本地区 (単独)	木造 戸数: 20戸 RC造 戸数: 16戸	[36戸] ■H26.3完成							
漁港	漁港	県	① 茂師漁港	(漁港災害) 防波堤 L=493m 岸壁 L=280m 他	★工事							
		町	② 小本漁港	(漁港災害) 防波堤 L=103m 岸壁 L=844m 他	★工事							
港湾	小本港	県	小本浜地区	(港湾災害復旧) 防波堤 L=871m 岸壁 L=119m 物揚場 L=105m 他	★工事							
医療	医科診療所	町	小本診療所	診療所施設整備	★工事							
教育	小学校	町	1 小本小学校	(災害復旧) 移転	用地、設計等			[移転完了まで仮設校舎を使用]				
	中学校		2 小本中学校	(災害復旧) 移転	用地、設計等			[移転完了まで仮設校舎を使用]				

資料：若手県ホームページ「社会資本の復旧・復興ロードマップ」(平成27年1月23日公表)

おわりに 明日の岩泉へ その3

東日本大震災から四年の歳月が流れ、住宅や公共施設などを含めて、復興の具体化が目に見えるようになってきた。被災地全体の苦闘が続く一方で、激しく動く社会情勢は、ともすれば被災の事実と記憶の風化を招きがちである。こうした事態の中で、復興状況の全体を見わたすとともに、未来の岩泉に向けて復興の知恵や工夫を伝えることを願い、「明日の岩泉へ」「明日の岩泉へ その2」に続き、「明日の岩泉へ その3」を編集・発行した。

仮設住宅での暮らしから災害公営住宅や集団移転地での新築住宅、被災場所での修復した住宅、と、住む場所が分散する中で、復興なった新しいまちが新しいふるさとになるか——「明日の岩泉へ その2」で示された課題のひとつに、コミュニティの再構築



があった。「その3」に登場するさまざまな年代の人々、とりわけ若い世代の住み手の言葉からは、かすかではあっても新しいまちの姿が見えてくる。岩泉の伝統を引き継ぎながら、ふるさと再構築に貢献していきたいと願うこの人たちの未来に期待を寄せたい。

被災地の中で、住民自身が生活を記録する「だれでもフォトグラフィ」は、忙しい日常の雑事を乗り越えながら継続し、撮影された写真の中には、笑顔や明るい風景が目に見えて多くなった。「復興」は堤防や建物の建設だけでなく、被災した人々の心の心の復興も重要であることが分かる。このような共同作業で培った絆は新しいまちの新しいコミュニティの構築にその土台としての重要な役割を果たしているに違いない。災害で犠牲となった方々のご冥福を祈るとともに、これまでの歩みをしっかりと明日に引き継いでいくことを誓いたい。

協力者一覧—— ありがとうございます!

◆インタビューなど (敬称略・五十音順)

阿部一雄	金澤慶治	富手淳	畠山辰子	本村稔	町立小本中学校
阿部隆一	小成末華	中野裕伸	腹子晴美	本村リウ子	伊藤航大 三浦愛海
大場彬央	鈴木善貴	野崎アイ子	前川勉	山口守	佐々木二千斗 三浦望
大町正明	鈴木麻衣子	箱石純一	三浦義昭		竹花侑恭 山口有稀音
大町雅宏	竹花純一	畠山孝男	三浦善生		

◆だれでもフォトグラファ (敬称略・五十音順)

阿部恵子	金澤千鶴子	佐々木一幸	長崎基一	三浦トシ子	小本地域振興協議会
阿部大夢	金澤卓也	佐々木秀明	中村昭	三浦なおみ	
阿部大海	金澤玲奈	佐藤憲二	箱石京子	三浦忍一郎	橋本照高
阿部範子	工藤米吉	鈴木孝徳	箱石チカ子	三浦浩子	八重樫定津彰
飯塚亜季	工藤良雄	田中道雄	箱石芙慈子	三浦幸美	富士フィルム株式会社
織笠清	熊谷貴里子	田村八代江	箱石昌彦	山口有稀音	UIFA JAPON
加藤勝彦	小成智子	田村美夏	三浦悦子	山口嘉久子	高柳慶子
加藤恒悦	佐々木愛香	田村千美	三浦淳一	和野浩也	土田環
金澤清香	佐々木悦子	田村美智	三浦登紀子		

◆応援メッセージ (順不同)

Ron Rordam (ロン・ロルダム)

Mayor, Town of Blacksburg (米国ヴァージニア州ブラックスバーグ町長)

Donna Dunay (ドナ・デュネイ)

FAIA, G.T.Ward professor of Architecture

Chair, International Archive of Women in Architecture

(米国ヴァージニア州立工科大学建築学科教授、国際女性建築家アーカイブ運営委員長)

Charles Steger (チャールズ・スティーガー)

Dr., President, Virginia Polytechnic Institute and State University (米国ヴァージニア州立工科大学学長)

Solange D' Herbez de la Tour (ソランジュ・デルベツ・ド・ラ・トゥール)

President, Union Internationale des Femmes l' Architectes (国際女性建築家会議 会長)

飯野徳子

東京都中央区総務部総務課女性施策推進係/中央区立女性センター「ブーク21」

明日の岩泉へ 東日本大震災 岩泉町復興の記録 その3

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

発行 岩泉町

岩手県下閉伊郡岩泉町岩泉字惣畑 59-5 電話：0194-22-2111

編集 株式会社生活構造研究所

東京都千代田区麹町 2-5-4 第 2 押田ビル 電話：03-5275-7861

協力 UIFA JAPON (国際女性建築家会議日本支部)

レイアウト 朝倉恵美子